

[ジョイント]

March 2010

No.3

【特集】

「いのち」の歌を聴け

コミュニティの再生が模索されるなか、絆づくりの重要性が指摘されている。本号では「くらし」の基本である母と子の絆を軸に、心豊かに生きるための「いのち」の智恵に耳を傾けてみたい。



「自由」という観念は、若い世代のばあい、じぶんたちの行動を取り巻くさまざまなしほりやくびきからの解放を声高に訴えるときによく口にする。慣行や制度への反撥である。フランス革命のときも、旧体制（アンシャン・レジーム）の転覆は、次代を担おうとする階層によって「自由」の名の下になされた。戦後すぐに生まれたわたしたちの世代が、その観念にすがりついたのは一九六〇年代。「セット・ミー・フリー」が合い言葉だった。これはロック音楽のタイトルでもあったが、同時代の歌には「自由」という願いを、大空に羽ばたく鳥に託したのも多かったようにおもふ。

その「自由」ということばが、解放を願う者からではなく、若いひとたちを管理する側から発せられたときにはるくなくとがない。そんなイメージが、わたしの記憶にはへばりついている。

はじめて「自由」ということばをかけたのは、小学校の美術の時間だった。近くのお寺へ連れだつて行って、お寺の伽藍の絵を描かされた。黒い瓦に、風雪にさらされて黒ずんだ柱や扉。黒や濃茶色や灰色で描くしかなかった。背景の空は、どう見ても青、樹の葉は緑だった。そう見えたというより、そういう観念にべつたり染まっていた。それでそのとおりに描いて教師に見せると、「もつと自由に」といわれた。「自由に」ということの意味がわからなかった。おなじようなことをいわれたらしい隣の同級生はゆらゆらするような不安定な形に伽藍を描きかえている。それでわたしは瓦を一枚一枚、ピンクやら黄やら黄緑やらで描き分けることにした。面倒な作業だったが、機械的な作業なので順調に描き終えた。すると先生の反応は、「えらいええ絵になったなあ。個性的な絵や」。

「自由って、個性って、かんたんなんやなあ」というのが、そのときの感想である。ことばの軽さだけはおぼえたように、いまもつておもう。もうひとつ苦痛だったのが「自由作文」の時間。わたしたちの世代の作文といえば、正面から「自由作文」を課されるというより、教師がなにかの事情で授業ができないときに、その空いた時間を埋めるためににかかせないと、いうことで求められた作業だった。児童にとって何を書いてもいいといわれるほど、難儀なものはない。書くというモチベーションをもたない児童にとつて、「何を書いてもいい」といわれるほどとまどうことではないからだ。ほとほと困ったのだが、あとになって知ったのは、プロの書き手というのは、書きたいことがなくてもそれでも書かなければなら

ない、という仕事に日々悶えているらしいということである。「自由作文」については、最近、知人がすごい感想をわたしに述べた。「自由作文」とは、だれに宛てるわけでもない「感想」という文章を書くという教育である。そういう教育を受けてきた生徒は、こんどは大学で「学会論文」なる同業者宛ての文章を書く練習をさせられる。さらに企業に就職すれば、こんどは業界向けの文章を書かされる。つまりいつも内輪向けの文章である。つまりいまの学生は、〈外部〉に向けて書く練習をしてきていない。宛先を分けて、書き分ける練習をしてきていない……。そう言うのである。

この指摘には、すぐに思いつくだけでも二つの意味がある。一つは、いまの社会に求められているのは、言わなくてもわかるようなことがらを濃密に共有している共同体内のコミュニケーションではなく、たまたまおなじ地で暮らすことになったたがいに見ず知らずのひとたちが、その地域を運営してゆくためにたがいに異なる思いをきちんと交換することを要するということである。インターネット、ブログ、２ちゃんねる、ツイッター……と、顔をじかにつきあわせることのない匿名のコミュニケーションに、いまひとびとははまっついている。けれども、これにときたま慰められることはあつても、身を支えられるということはない。ひとがじぶんがここにいていい理由をみずから納得させることができるのは、じぶん以外のだれかにとつて、じぶんがここにいないと困るといわれるときである。だれかに、あなたがここにいないと困るといわれるときである。「居場所」がないというのは、だれからもわたしがここにいないと困るといわれることである。特定のだれかにとつてじぶんの存在がどのような意味をもっているか、その確認がひとの存在を支える。だからこそ、きちんとした宛名をもつメッセージが切実な意味をもつのである。自己とはまさしく「他者の他者」（じぶんがじぶん以外のだれかにとつて意味ある他者であるということ）なのであるから。

この二つの意味で、わたしたちはだれかに宛てられたことばを、それにふさわしいことば遣いととも、送らねばならない。そういうことば遣いのなかではじめて、「自由」はわたしたちの身を護ることばとなる。

「自由」がわたしたちを護ることばとなるとき

大阪大学総長 鷺田清一

「自由作文」については、最近、知人がすごい感想をわたしに述べた。「自由作文」とは、だれに宛てるわけでもない「感想」という文章を書くという教育である。そういう教育を受けてきた生徒は、こんどは大学で「学会論文」なる同業者宛ての文章を書く練習をさせられる。さらに企業に就職すれば、こんどは業界向けの文章を書かされる。つまりいつも内輪向けの文章である。つまりいまの学生は、〈外部〉に向けて書く練習をしてきていない。宛先を分けて、書き分ける練習をしてきていない……。そう言うのである。

「自由」がわたしたちを護ることばとなるとき …… 2

特集：「いのち」の歌を聴け

【特別対談】母と子の絆——西館好子 × 三砂ちづる
「いのち」をつなぐ物語のために …… 4

研究助成プログラム・社会コミュニケーションプログラム
くらしといのちの豊かさをもとめて …… 10

「赤ちゃんにおむつはいらない」東京シンポジウム
冷静な観察と体験から学ぶ …… 12

【講演録(抄)】内田樹
根源的な生きる力の再発見を …… 13

研究助成プログラム、アジア隣人プログラム助成金贈呈式
相互扶助、自然との共存、情報の共有化 …… 18

アジア隣人プログラム・研究助成プログラム
2009年度 助成決定プロジェクト一覧 …… 20

Relay Essay ● 末廣 昭
アジアの希望と幸福、そして日本の希望の再生 …… 24

[温故知新]身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」●
世代をこえて受け継がれるもの …… 26

活動地へおじゃまします！
愛と恵みのケニア紀行 …… 30

JOINT ホット・インタビュー ● 板東あけみ
好奇心と協調性が人を動かす力 …… 34

トヨタ財団ジャーナル …… 39



Photo by Akemi Bando

「母子健康手帳」を手にポーズをとるベトナムの若いお母さん。その背におんぶされて子がやすやすと安らかに眠っている。どこかなつかしくもほっとする光景である。そして、カラフルな日傘とマッチした母親の笑顔の素晴らしさ！今号は、助成対象者である板東あけみさん撮影のこの写真で表紙を飾らせていただいた（板東さんの活動に関しては34ページを参照）。

CONTENTS

FIRST WORD ● 鷺田清一

「自由」がわたしたちを護ることばとなるとき …… 2

特集：「いのち」の歌を聴け

【特別対談】母と子の絆——西館好子 × 三砂ちづる

「いのち」をつなぐ物語のために …… 4

研究助成プログラム・社会コミュニケーションプログラム

くらしといのちの豊かさをもとめて …… 10

「赤ちゃんにおむつはいらない」東京シンポジウム

冷静な観察と体験から学ぶ …… 12

【講演録(抄)】内田樹

根源的な生きる力の再発見を …… 13

研究助成プログラム、アジア隣人プログラム助成金贈呈式

相互扶助、自然との共存、情報の共有化 …… 18

アジア隣人プログラム・研究助成プログラム

2009年度 助成決定プロジェクト一覧 …… 20

Relay Essay ● 末廣 昭

アジアの希望と幸福、そして日本の希望の再生 …… 24

[温故知新]身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」●

世代をこえて受け継がれるもの …… 26

活動地へおじゃまします！

愛と恵みのケニア紀行 …… 30

JOINT ホット・インタビュー ● 板東あけみ

好奇心と協調性が人を動かす力 …… 34

トヨタ財団ジャーナル …… 39

【特集】「いのち」の歌を聴け

ていく……。今、古き時代から伝えられてきたこの当たり前の事実が忘れられがちである。

「一つひとつの小さな「いのち」は、日々の「くらし」のなかで愛情をもつて育まれ、心豊かに楽しく生きるための智慧を身につける。

本特集では、母と子の絆を軸に、人と人とが支え合うためのコミュニケーション、生活を潤す希望ある社会を築くための各種研究や助成のありかたなどを考えてみたい。それは、私たちが「くらし」の原点を見つめ直し、よりよく生きるための智慧を探ることにほかならないからである。

その智慧を掘り起こすには「まだよくわからないけど、大事なこと」にたいする謙虚な姿勢、「小さなこと、だけど大切なこと」に気づく感受性が欠かせない。身体が発する「いのち」の声に、まずは耳をすましてみることから始めよう。

●わしだ・きよかず
1949年生まれ。哲学者。大阪大学総長。著書は『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』（阪急コミュニケーションズ）、『モードの迷宮』（筑摩書房）、『死なないでいる理由』（小学館）、『噛みきれない想い』（角川学芸出版）など多数。



津田塾大学教授
三砂ちづる
Chizuru Misago



NPO 法人日本子守唄協会代表
西館好子
Yoshiko Nishidate



特集
1

【特別対談】母と子の絆——西館好子×三砂ちづる
「いのち」をつなぐ物語のために



ひとつの出会いから

三砂 トヨタ財団と私の関わり、その経緯あたりから話を始めましょうか。

私が助成をいただいたのは2006年からなのですが、そのとき10年以上続けてきた研究助成プログラムが改訂されて、「くらしといのちの豊かさをもとめて」というテーマに

変わりました。その際の募集要項が素晴らしかった。

いろいろな研究者がいろいろな専門的研究をしています。本当に人間が豊かになっただけでいいか、「いのち」をつないだりすることに役に立つものはどれかあるだろう。形になっていないものとか、学問領域として確立していないようなもの、あるいは「成果」がぼんやりして見えにくいものでも、

本当の意味でのくらしといのちの豊かさに資するようなものに助成をしたい、という趣旨の要項で大いに共鳴したんです。私は疫学を専攻する研究者ですが、従来の研究の枠組みと予算ではどうしても実行できないテーマを抱えていて、その要項を拝見したときに、ああ、ぜひともトヨタ財団に応募してみたいと思ったのが「赤ちゃんにおむつはいらない」というプロジェクトだったのです。

西館 いい巡り合わせがあったんですね。

三砂 この要項の趣旨自体が、プロジェクトのテーマと同調したんですね。育児や子どもの知能の発達などに関してはさまざまな科学的研究が行われていますが、私たちの考えていた「おむつなし育児」というのは既存のどのような学問カテゴリーにも収まらないし、おむつをはずしてみてもいいんじゃないかというちよつとかわつた提案ですから、従来の研究助成にそぐわないなあと思つていたところで、トヨタ財団のこの研究助成プログラムと出会ったわけです。もともと、アフリカのお母さんたちは赤ちゃんにおむつをしていないし、日本の伝統的な家では生まれて2週間でおむつをはずしていたということも聞いていましたので、そのあたりを体系的にやってみたいな、と思つていたので。

西館 あれ、いい本ですよ。三砂さんのプロジェクトのことをまとめられた『赤ちゃんにおむつはいらない——失われた育児技法を求めて』っていう本（11ページ参照）。あの本を拝見するまで、私はトヨタ財団のその助成のことを知りませんでしたし、実際に育児のなかの、たいへん画期的なつていうか、本来なら当たり前のことなのですが、今になるとそれが画期的に思えるようなことがたくさん出てきていますよね。しかも三砂さんは、実際に多くの育児経験のあるいろんなお母さんたちを取材したり、地域特有の育児法を調査なさっています。素晴らしいですよ。なかなかできることじゃない。

三砂 私が今回実施した研究は、新しくイノ

ベータタイプな何かを発見したというのではなく、昔からあったもの、忘れられたものを少し掘り起こしたにすぎないのですけれど。そういう研究に助成金を出していただいたことに、ほんとに感謝しています。

西館 それも、素晴らしいことなのよ。日本は今、ともかく基本に戻らないと。人間や文化の根底にあるものを掘り起こして、しっかりと見つめ直さないと、もう、どうしていいかわからない社会になつてきているんじゃないですか。対処療法はいろいろあつて、ことが起こるたびに対策はとられるものの結局は元の木阿弥、いつも同じところに戻つてしまう。

だから育児でも原点に戻つて本来のありかたを考え直そうっていうことが、このプロジェクトによつてちゃんと提示されたのが新鮮でした。新鮮というのは変な言い方かもしれませんが、私の祖母なんかは当たり前にしてきたことですからね。でも、今新しく思えるということ、逆に今当然とされていることのおかしさがわかつてくる。若いお母さんたちに読ませたいなと、すごく思いましたね。本の題だけ見ると誤解されるかもしれないけど、おむつをはなから使うなと言っているわけじゃないのよね。

三砂 そうなんです。おむつをまったく使うなという話ではなくて、こういう「問題提起」に、まずは興味をもつてもらいたいです。じつは私たちにもすごく不安がありました。プロジェクトの2年目には、この「おむつなし育児」をお母さんたちに実際にやつてもら

おうということになったのですが、本当に興味を持つてもらえるかどうかはやつてみないとわからない。でも、やつてみて慣れてみると、私たちの期待以上にお母さんたちが夢中になつて楽しんでくださつて……。だから、本質的なものというのは、提示すればちゃんと伝わる、という自信にもつなりました。

西館 そうだと思つています。若い母親は駄目だとか、育児下手というけど、ほんとはそういう方法論じゃなくて、その基本にある「智慧」の部分を伝えなければいけないわけですよ。今のお母さんたちも頭ではわかつているし、ちゃんとやろうとは思っているのだけれど、刹那的な「楽」な方に流れるばかり。私の知っているあるお母さんは、おしつこで子どものおむつが重たくなっているから取り換えてあげなさいって言うと、面倒くさそうに「今日水分をあたえすぎたのかしら。だから、いっぱいしちゃったのね」って、原因追求で納得するだけ（笑）。そんなんじや、人間を育てることの楽しさや発見の喜びもないじゃない。つまらなくないのかしら。

私の娘がそうですが、最近の若い人たちのどの家庭に行つても感じるの部屋が汚いこと。ごみ屋敷寸前つて感じます。片付けなさいと言つて「忙しいからできない」「時間ができたらやります」っていう応えしか返つてこない。それって、自分の子どもがおしっこで気持ち悪い思いをしているんじゃないかつて察する感覚がなくなつてきているの、根っこは同じなのではないかしら。

三砂 家、汚いですよね。家事をしなくとも

それを批判する人はほとんどいなくなりまし
たから。家事全般のなかでも、お掃除はい
ちばん後回し。でも、やっぱり清潔に、身の
まわりを美しく保つという感覚はすごく大事
だと思います。



大切なことに気づくこと

西館 赤ちゃんは、当然のことながら、なに
が心地よく、なにが不快かを感じる感覚や意
識がある。言葉をしゃべれなくとも、赤ちゃ
んとの「会話（コミュニケーション）」は母
親さえその気になれば気持ちよくできるはず
なんです。相手を思いやるとか、互いに察し
合うとか。ある意味で動物的な、大人以上の
感受性を赤ん坊はもっている。でも、親がよ
く見てよく聴いて、よく匂いをかいで、よく
話しかけていくことがなければ、子どもか
らなにかを察知するような「予感」は生じな
いですよ。そういう基本というか原点に立ち
返って、育児とか人との絆とかを考え直さな
ければいけないんじゃないのかしらね。

三砂 一人の人間の中には、女性でも男性で
も同じだと思いますが、非常に高い面と低い
面の両方が必ずあるんですよね。「高い」つ
て何かというと、人間が共生していこうとす
る方向を向いていること。お互いに愛し合い
助け合って生きようとする気持ち、というん
でしょうか。人間というのは自分の世代で終
わるわけではなくて、今の世代までずっと続
いてきたもので、これから先も人間は続いて
いく、ということの、自分もその一コマであ



子守唄がおむつをはずす!?

西館 三砂さんじゃなかったかしら、今の70
代はたいへんな時代だつて言つてたの。

三砂 はい、それまで伝えられてきたことが
今の70代で切れている。よかつたこともある
けれど、本人たちにもたいへんだつたことも
あるはずだ、と言つてきました。

西館 私は70歳だから、よくわかる。今の
お母さんである20〜40代の方たちを見ている
と、「いったい女つてなんだらう」つて女の
人自身が考えないと、このまま行つたら地球
は滅びてしまうだろうつていう、そういう予
感さえあるんですよ。

私が出産したときは、たいへんな大騒ぎ。
陣痛室つていうのがあつて、その真つ暗な陣
痛室で、自分の身体がはがれていくような痛
さにうんうん唸つて、頭に巻いていたピン
カールは飛び散るして（笑）、もう、なんと
もすごいわけ。何時間も苦しんだんだけど、
そしたら「ぼん」つと落ちるように産まれ
た。ほんとにポコンつていう感じなのよね。
そしたら、痛みもけろつとなくなつた。その
ときすごく感動しましたね。私が自身に感動
したし、母に感動したんです。ああ、あんな
憎たらしい親でも、こんな思いをして私を産
んだのかつて。私と母はずつと仲が悪いん
ですよ（笑）。普段はそんな話したこともない
しね。でも、そのときだけは、お母さんは偉
い！つてね。なんというかさきりげなくも生
きる女の強さに素直に感激した。母を見直し、



●西館好子(にだて・よしこ)
NPO法人日本子守唄協会代表、社団法人日本民族
音楽協会副理事長、主な著書に『うたつてよ子守唄』
(小学館)、『赤ちゃんのころが育つ子守唄「ねんねん
ころり」(エクスナレッジ)などがある。

るといふ、そういう方向ですよ。つまり、
愛情をもつて共に生きていくというベクトル
をもつ「高い」意識と、そうではない、エゴ、
自分の利益だけ考えて自分さえよければいい
という「低い」部分の意識というのは誰のう
ちにもあることです。ただ、ある時代のなか
で高い部分をより高くという方向で出てくる
か、いや低くてもいいんだ、自分さえよけれ
ばかまわらないんだという方向にシフトするか
ということが、その時代を生きる人間に大き
く影響すると思う。私は女性というのは、自
分の人生において、自分の身体に起こること
を素直に受け止めていけば、自然に高い方向
に、つまり人間を存続させていくという方向
に引き上げられていくものではないかと考え
ています。

尊敬しました。ほんの2カ月くらいの間です
けど（笑）。その母を産んだ母がまたいるわ
けで、そのまた母も……。私、お産すること
で女が変わるつていうことがよくわかりまし
たね。ひたすら自分の身体と向き合い、戦う
わけじゃないですか。あんな出産ができれば、
大抵のことはなんでもできるんじゃないかと
思いますね。でも、私の世代あたりから、そ
んな親からの経験が伝わらなくなつてきてい
るんじゃないかしら。

三砂 ほんと、そうですね。そして、女が
変わることで、世の中も変わるわけ。
でも、そんな経験や身体の「知」の伝承が
どんどん失われているのも確かです。全部、
医療の枠組みに取り込まれて。女性自身も自
分で産めるとは思つていなくて、産ませても



●三砂ちづる(みせい・ちづる)
津田塾大学教授、疫学者。主な著書に『オニバ化
する女たち』(光文社)、『身体知(内田樹氏との共著・
バジリコ)』、『赤ちゃんにおむつはいらない』(勁草書
房)、小説に『月の小屋』(毎日新聞社)などがある。

本当に自然なお産を経験すると、ちゃんと
子どもがかわいいと思えるようになってくる
し、おっぱいも出るようになるし、自分の身
体もグレードアップするのだけれど、今なか
なか、医療の介入なしには産めなくなつてき
ている。そうやって女性の身体も変わつてき
ていることを、研究の途上で感じてきました。
だから、自然な形で月経、妊娠、出産、あ
るいは母乳育児などにきちんと自分の身体を
使つて向き合つていれば子どもはかわいいで
すし、やっぱり周囲をよりよくしていこうと
いう気持ちにもなるし、小さなことから本当
の意味でいい方向に変えていこうというペー
スになるはずですよ。だけど現在、なかなか女
性が自分の月経のことに向き合つたり妊娠出
産を肯定的にとらえたりとか、子どもも「自
分で産むんだ」と自覚したりとか、そういう
ことがしにくいですし、できていないですよ
ね。

「おむつなし育児」には子どもの排泄と向
き合うことで、そこにににか女性が気づくた
めのきつかけをつかみたい、つかんでほしい
という思いが込められています。「あなた、
大切なことを見過ごしてはいませんか？ここにも
あるから、探してみてください」というような。
西館さんにとつての子守唄もそうだと思う
のですが、時代の流れのなかで忘れ去られそ
うな小さなこと、でも、くらしのなかになく
てはならない大切なことに気づくきつかけを
提示したい。今、高き方向に人々の目や気持
ちを向ける「善きもの」を、私たちの世代は
ほとんど提供できていないと思うので。

らうものだと思つている。産科医が不足して
いるとか、産む場所がないつていうけど、誰
が産むのか？産科医が産む、と思つている
んじゃないですか？自分が、自分で産むつ
てことを引き受けることができなくなつてき
ている。それもすでに3世代目ですからね、
日本の女性が病院出産することが普通になつ
てから。全般的にはもう、85歳以上の年齢の
方しか、自分の身体を使った経験知がなく
なつていんですよ。

西館 私の「仕事場」の一つは老人ホームな
んです。お産と同様に、子守唄を真に体験的
に知つているのはお年寄りしかいないですか
らね。

最初に私が取材先の老人ホームへ行つたと
き、その理事長はじめ所員全員に「だめで
す。認知症だから、会つても無駄です」つて
けんもほろろ。私はそれでも「ともかく会わ
せてほしい」と頼み込んで、おばあさんた
ちを4人くらい集めてもらつた。実際、みな
さんどんよりとした生気のない顔をしていま
したよ。それで、私は「あなたはどここの生ま
れ?」、「おばあちゃんはどこの人?」つてき
いて、その人の土地のわらべ唄をうたつたん
です。

そしたら、だんだん、だんだんその老人た
ちの顔が子どものように、赤ちゃんみたいに
輝いてきた。それがひきがねになつて、たと
えば「あなたがたどこさ、ひごさ、ひごここ
さ」つてうたうと、おばあさんの手がいつの
まにか「まりつき」の格好をするんです。そ
のうちにね、どこかで回線がつながるんで

しようか。ふつと唄の切れ端が出てくるのよ、おばあさんたちの口から、つぶやくように。そうやって、「下手だから」とか「忘れた」「知らない」とか言いながら恥ずかしそうにしている。うたいます。で、うたい出すと止まらない。

そのとき方言も出てきますから、テープにとつて帰ってから起こすわけですよ。それでもなんだかわからない言葉があるから専門の研究所に行って調べてもらおうと、「これ、明治か江戸の頃の言葉ですよ」つて。詰まってるんですよ、そのおばあさんの身体に。私はうれしくなって施設の理事長さんに、「ありがとうございます。とってもいいお話を探録できました」つてお礼を述べると、「いや、西館さん、たいへんなことが起こったんです」つて言うの。あの取材のあとね、おむつをしていたおばあさんが「自分で行く」つて言うんですつて、トイレに。なにか、とても大切なことが伝わり、とてつもないことがはじまったつて私も感じた。で、やっぱり、この仕事を私はやり続けなければならぬつて強く思いましたね。

おむつをはずすつていうのは、一つの希望の象徴なんです。明日への希望。排泄がきちんとできること、そして気持ちよくきれいになるつていうことは、希望があるからこそできるわけじゃないですか。

子守唄もおむつも、赤ちゃんから老人まで、そして「普通の」大人の生きる姿勢にまで通じることなんだということを感じましたね。だから、その智慧の通風路を今こそ開かなくてはならないと思うんです。



絆は日々の「くらし」から

三砂 私は「権威的な知識」という言い方をしていますが、学校で習ったり病院などで応用している人間が積み上げてきた科学の知識は存分にあるわけですよ。十分すぎるくらいにあつて、もうこれぐらいにしておいたほうがいいんじゃないか、というくらいいたくさんある。それはもちろん重要なことですが、やっぱり、人間はそういう権威的な知識だけでは生きられない。「くらし」に根付いた智慧も必要なのです。

昨日より今日、今日より明日に直線的に「進歩」していくようなものではなくて、人類が何万年もの間ずっと同じようにやってきた円環的な営みというのが生活の基本だと思うし、人間が育つたり、死んだりしていくことはそういうものに「乗っていく」ことだと思ふのですけれど、そのための智慧が今まったくといいつていいほどなくなつてきている。今でさるだけそれをたくさん集めておかないと、生活というものがめちゃくちゃになつて足場を失い、生きて、そして死ぬということのストーリーが消え失せてしまう。

西館 日常生活のなかだからこそ教えられることつてあるじゃないですか。「くらし」つていうのはまさに「生き死に」の繰り返しの場であつて、それを日々の生活のなかで「伝え場」として教えることが大切で、学問として教えるようだとか、知識として記憶させようつてことではないはず。その日常で教えら

れること、学ぶべきことが今、全部希薄になつてしまつている。

それは、たとえば「絆」つていう言葉にも通じると思うんですよ。絆をつくるために、お父さんお母さんと一緒に食事しようとか、動物園に行こうとか、ね。それが無駄とは言わないけれど、知識とか義務で押し付けられたつて、絆なんかできつこない。全部が全部、マニュアル化されて型にはめられた図式の中で、絆なんかできないと思う。ほんとうの意味での絆つていうのは、互いに相応の距離感をもつなかで、相手を尊重しながら、くらしの歴史やそのなかで伝えられる智慧からできていくものであつて、そんなお手軽な方法論でその気にさせたつて駄目。そこらへん、行政なんかも認識が足りないんじゃないかしらねえ。

三砂 むずかしいところでしょうね。私たちのプロジェクトは、アカデミズムのなかで業績を積み上げて評価を得るためにやったのではなく、私たちが集めた智慧を多くの普通に生活をしている人たちに還元したいと思つていました。しかしやはりシステムはシステムとして機能しているわけで、アカデミックな研究の枠組みにあわせていかねばならないところもあります。

西館 でも、三砂さん、それはそれでいいのよ。それがいいの、ある意味で。研究を研究としてやる人がいなくなつたら、そういう問い自体がなくなつちゃうんだから。逆に誰かのために、何かのシステム維持や破壊のためにはなければならないつていうことが研究の

先に立つたら、押しつけがましい権威になつてしまうと思うの。研究者は研究を、その範囲でしたいからするつていうのが基本だと思うんです。それが「結果として」自分の生活に活かそうというときの、人々の道しるべやヒントになるんです。

それと、あれもこれも、何でもありの自由つて、自由じゃないわよね。どこからも邪魔のはいる余地がなくなると、何でも好き放題できるかと思つて、言いつばなし、やりつばなしで責任感がなくなる。権威を振りまわすことが自由だつて勘違いしてしまう。今は知識としての情報はなんだつて簡単に手にはいるし、生活に何の不自由もない。ある意味で、やろうと思えば何だつてできる。できるだけ、何もやらないつていうのが今の時代でしょう。だからこそ、やっぱり、自分にとつて何がいちばん大事なのかつて考える時間や場をもつことつて、とっても大切よね。それは、たとえば学校や会社で、「上」からあたえられるものじゃない。自分でつくつていかなければ何にもならない。シンドイことだけだ。

絆だつてそうでしょう。親子が毎日、いっしょに寝たり起きたり食べたりするなかで、自分たちが自分で考え、つかむつていう、くらしの根本にある「生きるための教え」を学んでいかなければならないつて思うわけですよ。これをこうすれば絆ができますよなんていう万人向けの処方箋なんてないわけで、ときにはただ黙つて見つめてあげる、ときには何かを相手から察したら手を差し伸べてあげ



歌の力、物語の力

るとか、ね。仲がいいとか悪いとかつていう問題じゃなくて、日々のくらしのなかで、ハレとケの境目をつくるとか、互いの「いのち」を尊重し合うとかの濃密な時間のなかで絆はできてくるものでしょう。小さな些細なこともかもしれないけど、そういう「しるし」に気づいたり、時間を共有できることつて楽しいことじゃないですか。だから、振り返つてみると、育児に一生懸命だつたときの時間が私をいちばんよく育ててくれたと思つていますよ。子どもたちに、娘3人ですけど、感謝しています。

三砂 よくわかります。この研究はとても楽しんでやつてきました。日本のお産のシステム自体も私はとてもよくできていると思つています。でも、むしろ、日本で問題なのは産むほうの女性の側なんだと感じるようになりました。西館さんがおっしゃるようなことを楽しめることを知らないから、自分で産む気がない。つまり「いのち」を継ぐことに喜びが感じられなくなつていく。

女性たちの「姿勢」はどうしたら変わるのか、どうしたら次の世代の女たちが今とちがう方向でものごとを見ることができるようになるか。これからは、そういうことに自分の人生に残された時間と労力を使いたいな、と。研究の積み重ねも大事ですが、西館さんのお話くださった唄（歌）とか、物語の力も必要ですよ。



協力：割烹 馬目(まのめ)
東京都江東区亀戸6-38-8
写真撮影：川村容一

三砂 「お産講」ですか。素晴らしいな、それは。とても興味があります。物語には、物語であればこそ人の心を動かす力や、人をたすける本当の意味での智慧がこめられていると思う。私たちの役目は、今に通じる物語を掘り起こしたり、未来につながる物語をつくつたり演じたりすることです。ね。

研究助成プログラムの趣旨について

トヨタ財団研究助成プログラムでは、「くらしといのちの豊かさをもとめて」というテーマを掲げ、助成活動を行っています。

このテーマは、近代化や産業化が進み、効率性や利便性が重視されるなか、合理的でない、意味がない、あるいは古いものである、として忘れられ、あるいはこわされてきたさまざまなものにこそ、私たちのくらしを豊かにする鍵があるのではないか、いのちの輝きをはぐくむ手があるのではないかと、という問題意識のもとに設定されたものです。

本テーマが新たに掲げられた2006年当時は、漠然とした未知数のメッセージであったにもかかわらず、「まだよくわからない、でも大事な問題である」「精巧な概念操作や方法論などはそのうち後から付いてくる、とにかくやってみよう」というこちらからの投げかけに対し、全国そして世界各地から、多くの魅力的な研究プロジェクトが寄せられました。

2006年度から9「おむつ」研究について

そのなかから本稿では、2006年度研究助成プログラムで採択されたプロジェクトの一つをご紹介します。「赤ちゃんにおむつは

いらぬ——失われた身体技法を求めて」(研究代表者：三砂ちづる/津田塾大学教授)と

題する本研究は、近代化の過程で失われた人間のもつ身体技法の可能性について「おむつ」の視点から着目したものです。「身体的に密に育てられた赤ちゃんは、言葉によらない身体を通じたコミュニケーションが可能であり、おむつもさほど必要ではなかった」という高齢者の方の記憶や過去の記録に注目した三砂さんは、おむつによって日常的に不快な布を体にあてがわれている赤ちゃんの身体機能と、赤ちゃんのサインを察知する大人の側の感受性が低下しているのではないかと、いう問題意識を掲げました(左に紹介した書籍もご参照ください)。

2年間の共同研究として行われた本プロジェクトでは、1年目に日本でのおむつの変遷に関する文献調査や年輩の育児経験者、現在の保育関係者からの聞き取り調査と観察、また、インドネシアでの海外調査がなされました。そのなかで、近代化とともに「おむつはずし」を含む育児のお手本が、一般のお母さんたちの豊富な育児体験にもとづいた智慧(こうししたお手本となるお母さんたちは「賢婦人」と呼ばれていました)から、医者や心理学者といった専門家による「科学的」な言葉へと移行していったことが明らかにされて

います。

プロジェクト2年目には、実際に現在育児に取り組んでいるお母さんたちを巻き込み、「なるべくおむつを使わない育児」が実践されました。その結果、研究に参加したお母さんたちの日々の育児から、次のような知見が報告されました。

- 赤ちゃんはおむつをしていないときのほうが明らかにご機嫌であること
- 赤ちゃんは排泄の際にサインを出していること
- 赤ちゃんに注意を向けることで徐々にそうしたサインがわかるようになってくること
- 排泄を通して、言語を介さない赤ちゃんとの身体的なコミュニケーションが可能になること

特に、お母さんが赤ちゃんからのサインを感じるといった親子間の根源的なコミュニケーションは、「いのちの輝き」にも通じる育児の本質的な喜び、幸せとなり、赤ちゃんが本当に必要なことを自分の身をもって考えるきっかけになり得ることを示唆しています。こうした人間に備わっている身体を通じたコミュニケーションの可能性と、社会の常識として受け止められているものへの疑問を呈する姿勢を持った本プロジェクトは、「おむつなし育児」を楽しむお母さん



上/三砂ちづるさん(左)と、和田知代(右)さん(東京シンポジウム)
下/子どもづれのお母さんたちでにぎわう会場(京都シンポジウム)

学術的・実践的な報告がされた後、おむつなし育児を実践したお母さんたちによる体験発表がなされました。パネルディスカッションも含んだ東京・福岡でのシンポジウムをはじめ、どのシンポジウムも満員御礼の盛況で「おむつなし育児」への関心の高さがうかがわれました(東京シンポジウムに関する記事は次ページに)。

育児中のお母さんが赤ちゃんと一緒に参加する姿が目立ちましたが、お父さんや学生、保育関係者の方など関心を寄せる層は多岐にわたっています。また、新聞やテレビによる報道も多くなされており、「おむつなし育児」という一つの選択肢が着実に社会へと歩み始めています。

親子間のコミュニケーションに留まらず、社会の最小単位である家庭が、家庭の最年少者である赤ちゃんの排泄を中心に相手を思いやる生き活きとした場となることは、社会に多く存在する小さいけれど大切なこと、小さいからこそ大切なことにもつながっていくのではないかと考えます。

本プログラムでは、この研究プロジェクトへの助成を通じ、私たちの身近にある「くらしの喜び」が培われることを期待して、今後の発展を見守り続けていきたいと考えています。

社会コミュニケーションプログラムについて

社会コミュニケーションプログラムは、2008年度から新しく設けられたプログラムであり、過去の助成プロジェクトの成果を、広く社会に発信し、普及させることを目的としています。

本プロジェクトは、研究助成プログラムにおいて2006年度から2年間の研究を終えたあと、2009年度社会コミュニケーションプログラムにおいて、全国4カ所(京都・東京・仙台・福岡)でのシンポジウム開催、およびDVDの制作を対象とした助成が行われました。

シンポジウムでは、三砂さんと共同研究者の和田知代さんによって2年間の研究成果の



赤ちゃんにおむつはいらぬ

——失われた育児技法を求めて

三砂ちづる [編著]

- 発行：勁草書房
- 発行日：2009年8月28日
- 価格：2,000円＋消費税

三砂氏を中心とした保育士、母子保健・育児関係者、民俗学者らでなる共同研究者による共著。代々受け継がれてきたくらしの智恵や技が失われつつある現在において、それらを再び見つめ直すことで得られる気づきや喜びが「おむつ」の視点から生き活きと伝えられている。現在、そして未来へ伝えたい母親の想いが詰まった一冊。

冷静な観察と体験から学ぶ

●トヨタ財団研究助成プログラム

2009年度社会コミュニケーションプログラム助成プロジェクトである「赤ちゃんにおむつはいらぬ——失われた身体技法を求めて」【研究代表者 三砂ちづる（津田塾大学教授）】の東京シンポジウム（会場：津田塾大学）が10月25日（日）に開催されました。当日は雨にもかかわらず、赤ちゃん連れの家族など260名以上の参加者がありました。第一部では研究チームから、近代化に伴うおむつ育児の変遷、伝統的なくらしをしているアジアやアフリカでの赤ちゃんの排泄事

情、おむつなし育児の実践から得られた気づきなど、研究助成プログラムの助成プロジェクトとして2006年度にスタートした本研究の成果が発表されました。そして、実際に研究に参加して「おむつなし育児」を実践しているお母さんたちによって、具体的な方法を交えつつ、赤ちゃんの「排泄したい」という欲求に応えるという子育ての楽しみや喜び、信頼関係の構築といった体験談が披露されました。また、第二部では内田樹さん（神戸女学院

大学教授）や西川昌宏さん（東京都昭島市わかきさ保育園園長）による特別講演が行われました。フランス現代思想を専門とする内田さんは、自身の子育ての経験や武道家としての立場から、身体のセンサーを駆使して「物事を先駆的にスキヤンする能力の重要性」が「根源的人間力の再発見につながる」と述べられました（次ページに講演の抜粋を掲載）。また、西川さんは長年の保育園経営の経験から、赤ちゃんの生理的欲求に応える「おむつなし育児」に関連して「受容してあげること」が「自己肯定感」につながることや、子育てのアドバイスなどを述べられました。

そのあと、二つの講演を受けて、三砂さん、内田さん、西川さんによるパネルディスカッションが実施されました。ここでは、「科学的根拠を超えた説得的な言葉が求められている」と三砂さんが述べられたあと、「おむつなし育児」を実践するお母さんたちに向けてのメッセージとして、西川さんからは「子どもに対してのある種の介入が必要であり、そのタイミングを見計らうためにも冷静な観察力が必要である」ことが、また、内田さんからは「『おむつなし育児』に引き寄せられる身体感受性を大切にすること」などが語られました。

最後は三砂さんからの「赤ちゃんは優しく、どんな親でも受け入れてくれる」という印象的なメッセージをもってシンポジウムは大盛況のうちに幕を閉じました。



①会場のようす ②西川昌宏さん ③④おむつなし育児の体験者たち

「天下無敵」とは

ご紹介いただきました、内田です。赤ちゃんのうんちとおしっこのさせかたがテーマのこの場で、なんでぼくが講演することになったのかよくわかりませんが（場内笑）、三砂ちづる先生とは以前に何度か対談したことがあり、そのときにすごく意気投合いたしました。『身体知—身体が教えてくれること』（バジリコ）という本をつくったという経緯があります。

三砂先生は疫学、ぼくはフランス文学というまったくフィールドがちがうところでやってきた人間が、ずいぶん似たようなことを考えているな、と。現代日本における家族のありようとか、教育のありかたとか、とくに人間の身体についての教育のありかたについて、すごく通じるものを感じておりました。敬意と関心をもって三砂先生のお仕事をずっと見てきたのです。

今みなさんのお話を聴いていて、あいかわらず三砂先生のおやりになっていることは、とつてもディープだなと感動しました。自分のやっていることかというと、大学で専門としていることよりも、武道家としてのこれまでの経験と相通じる点が多いのです。

合気道のことなんて、みなさんほとんどご存知ないと思います。通常、武道という格闘技とか護身術を思い浮かべて、敵を攻撃したり回避したりする技術の体系というふうに考えていらつしやるんじゃない

【講演録(抄)】

根源的な 生きる力の 再発見を

内田樹

●うちだ・たつる
神戸女学院大学教授。著書は『私家版・ユタヤ文化論』（文藝春秋）、「日本辺境論」（新潮社）、近著に『邪悪なもの鎮め方』（バジリコ）など多数。

いですか。実際には武道というのはそういうものではなくて、自分の置かれていた世界全体の状態、そのなかで基本的にバランスよく、気持ちよく、上機嫌に生きていくこと。自分自身のもっている生きる力が最大化していったら、極めていい状態で生きていく。誰もがいずれ死んでいくわけですけど、生きていく間、そのように心身の高いパフォーマンスを実現するための体系が武道であると、ぼくは考えています。

「天下無敵」という言葉がありますが、武道におけるそれは、天下にいる敵をすべて倒してしまつて敵が誰もいないという状態ではないはずなんです。そうではなくて、敵というものがいない。さまざまなかたちで多くの生き方に関与してくる人がいる。ぼくの動線をふさぐ人がいる。動きを制約する人がいるわけだけれども、動線をふさがれたらその動線はなかつたことにする。はじめから、自分はこつちに行くつもりだつたというふうに頭を瞬時に切り替える。他人からバツと手をつかまれたら、生まれてからずっとこうだつたというふうには……。理屈としてはわかつても、身体感覚として身につけるのは非常にむずかしいのです。

そのためには、主体とか自我という概念そのものを根本的に見直す必要がある。他人に腕をつかまれたときに、一人だつたら自由に動けるのに、こいつにつかまれたせいで動きが制約されている、嫌だなと思うたらもうダメなんです。自分がたまたまここで誰かにつかまれ

たとする。すると胴が2個あって、頭が2個、腕と足が4本あるキマイラ（混成生物）のような生き物である。私はそういう生物であると断定する。2体の動物が合体したキマイラといえば、非常に複雑な構造体ですから、一人で動くときよりは、ややこしい法則になるけど、構造体である以上は、構造法則があり、運動法則があるから、ある種のルールに則って動けば、この共身体として協同的に構築された身体はコントロール可能である。では、どうやってらコントロールできるのか。それは、自分一人の身体をどうやって自由に動かすかではなくて、彼または彼女とそこにつくられた複合的な身体をどのようにして操作すれば、その共身体のパフォーマンスは最大化するかを考えることなのです。どう考えたって二人分なわけだから、力は2倍になるわけですよ。使いようによってはですが、一人では絶対できないパフォーマンスを達成できるはずなんです。

車馬一体とか人馬一体といった言葉がありますが、おそらく優れた騎手たちは文字どおり人馬一体となっているのです。自分と馬が2体の生物として別々にコントロールされているのではなくて、自分の身体が腰から下が馬とつながっていて人と馬がひとつながりの非常に複雑な構造体をつくっている。ケンタウルスのようなキマイラになっていて、ある一つの法則のもとにコントロールされて共身体として走る。通常の状態とは頭（身体感覚）が切り替わっているのです。

ケース・バイ・ケースのコミュニケーション

赤ちゃんには言葉が通じない。母親にとっては自分の身体から出てきた自分の一部分みたいなものだけど、明瞭な言語によって意思を聞き取ることができない。赤ちゃんって何を感じ、何を考えているのかわからない一種のエイリアンです。そのようなエイリアンとコミュニケーションを立ち上げていくにはどうしたらよいのか。そのための育児書の類が世の中にはたくさん出回っているわけですが、実際どうやったらいかにについて、「現場」の母親たちすべてにとって通用する回答など存在しない。相手はエイリアンですからね。

先ほども、「おむつなし育児」の経験者のかたが育児はケース・バイ・ケースだということをかかんにおっしゃっていました。まさにそう

何小節かつながって流れては、ふつと消えてしまうというようなことを繰り返しながら。

食事のあと、皿を洗っているときもそうでした。頭のなかをそのメロディが流れていて、今朝はやけにこの曲が頭にこびりついて離れないなと思っていた。で、ある瞬間、メロディが途中でふつととぎれたんです。そしたら、ちよつと離れたところにいた娘がその続きを歌い出したのです。CMソングの続きを。

ぼくは口に出して歌っていたわけじゃないから、ハッとびっくりして慌てました。なんでその歌を歌うのってきいたら、急に歌いたくなつたからっていうんですよ。「えーっ！」と驚いて……。これって、なんとするか、テレパシーってやつかな、と。ずいぶん古いCMソングだったので、娘は知らない歌のはずなのに、知らないはずのメロディが伝わって彼女の口から出てくるんですから。

そのころ、ぼくは離婚してましたから、父子家庭です。「母親」の役になって子どもを育てている時期が長かった。さすがに母乳はあげられませんが、ごはんをつくって、洋服を着せて、学校にやっつて、家のなかを掃除したり布団を干したり、繕い物をしたりで、そういうことを毎日やっている時期があつたんです。母親となつて子どもとの関係が非常に密接になつていたから、そういう「えーっ！」となるような事件というか、身体的な同調が起こつたのだと思うんです。

ぼくが頭のなかで奏でたメロディが向こうにいる娘に伝わったわけですが、でもそれって娘からしてみたら、ふと歌いたくなつたということなんです。自分のなかからメロディが知らずに出てきて歌いたくなつた。ある意味でそれはぼくが刷り込んだ、というか送信した。ぼくが送信したんだけれど、本人が自発的にその歌を歌いたくなつてしまふ……。あつ、こういうふうなかたちにもつていくのが合気で、武道的な意味で万有共生とか、天下無敵っていうことなんだと、そのとき思いました。

強い弱いとか勝った負けるとか、成功した失敗した、どっちが上か下かと格付けしたりとか、そういうことは全部、主体というか自我を強化するべくはたらくわけ

なんです。ある人が成功した事例というのはすべてに適用できるわけではなく、逆にほとんどの場合はできない。子どもとのコミュニケーションの最良の方法というのは、形として定式化してお奨めすることができないのです。でも、それがいい。それでいいんじゃないかって、それがいいことなんです。

目の前にさまざまな事例があつて、その個々の事例の間には矛盾がある。簡便な仮説をもつてきて、全部を説明しようとしてもできない。反証事例がいっぱいある。にもかかわらず、その反証事例を含んだような、包括的な仮説があるにちがいない。親子間のコミュニケーションについて、まだ、誰も到達したことがないけれども、なにか統一的な仮説が存在するにちがいない。ある種の美しい秩序があり、隠れた秩序に基づいてすべての親子関係が構築されている。私たちに、その秩序の一部分しか明かされていないけど、自分自身の個人的な経験を通じて、宇宙的な根本原理に触れることができるのではないか……。

ちよつと大袈裟な言いかたですが、一見ランダムな振る舞いの背後に齊一な構造、ある美しい原理や法則が存在すると確信すること。それは、自然科学者にとつて必須の能力というばかりでなく、人間のもっている最もすばらしい力の一つなんじゃないでしょうか。

その際のいちばんの基本になるのは、やっぱり、目の前にあつて、そこで起きているさまざまな現象。説明できない現象が目の前で起こるとき、どのように理解したらよいですかと誰かに答えを聞きに行くのではなくて、自分に引き取るっていうか、自分自身で考えるっていうこと。それが、ぼくはすごく大事なことだと思うのです。

小さな共同体、弱さが要求する共生感

ぼく自身、もうずいぶん前の話になりますが、子育てにかなり専念していた時期がありまして、育児でずいぶんいろいろ不思議な経験をしました。子どもが7つか8つのときのある日、朝起きたときから、頭のなかでずつとあるCMソングが流れていたことがある。昔のテレビ番組でつかわれていたCMソングのメロディが、歯を磨いて顔を洗っているときからなぜか頭のなかで鳴っていて止まらないんです。

強固に自立した自我があつて、他者の影響を排し、自分のほうが自由に動き、自分が中心となつて物事にかかわりながら他人を抑え込みコントロールしていく。そういう種類の自我、個をどうやって構築するかということ、ことに近代の人間は課題として生きてきたんです。でも、それはちがうんじゃないか。結局そんなことが言えるのは、「安全で豊かな社会」の強い（と思つている）人間だからであつて、逆に、ぼくと娘との間に共感が成立したような、そういう種類の濃密な空間がなくなつてしまった。今思うと、やつぱり、そのときぼくたちは弱かつたですね。

すごく弱かつた。二人きりの小さな共同体をつくつて、東京から移り住んだ。まわりに友人も知人もいない、誰も支援も保護もしてくれない状況に二人で向き合つたとき、ぼくたち二人でひつしと抱き合い、助け合わなければならないということがたびたびあつた。しかし、非常に貧しく乏しい環境のなかで自分たちが支え合わなくては生きていけないんだというような、弱さが要求する種類の共生感つてあるんですよね。だから、逆説的ですが、そのときぼくたちはすごく強かつたという記憶があります。

その後、子どもも成長し、だんだんとお互いに友だちや知人もできて自立心が出てくるようになって、そういう種類のコミュニケーションというか、テレパシーで通じるみたいなものが希薄化していったんですけれども、それはどんな場合にも、今の人全般にいえることじゃないかと思ひます。

だんだん豊かに安全になつてくると、みんな分離しはじめて、自分で好きに動けるように自己決定して、自己責任で行動するっていうふうになつていくんです。自己で責任とつてもいいって言えるのは、万一失敗することがあつても、それで死ぬわけじゃないんだからっていうような、ある種の見くびりがある。状況に対する安全を確信しているからこそ競争とか対立ができる。

危機的な状況を一生物として生き延びようとすると、不安や恐怖によつて人間はすごく強靱な共同体をつくる。鎧みたいな自我をバースンと破つていって、複合的



な身体になろうと指向する。自我に穴がいつばいあいて、いろんなものが出入りし、それぞれがやわらかく結びついていって、一つの多細胞生物のようなものができるんじゃないかとぼくは考えています。

「ハンカチ落とし」で微細なシグナルをキャッチする

過去20年間ほどの日本社会は、どんどん人々が孤立していくような社会で、孤立することを喜ばしいこととしてきた。みんな孤立して、自分が自分で自分の利益を追求していく。「自由」に活動して、自分の可動域を拡げていく。それがいちばん素晴らしいことのように言われてきたのです。

だけど、そんなことよりも大事なものは、生き延びるってことですよね。いまの日本の社会、だんだん、だんだんと生き延びるのがむずかしい社会になってきているように感じられます。いろいろな政治や経済の情勢があり、人口もピークアウトして、日本社会全体の活力がどんどん弱まっている。そういうときにですね、忘れられていた「共生のための技術」っていうものを、人は少しずつ思い返しはじめているのではないかと気がします。他人とどうやって相互依存的に生きていくか、そのためのノウハウをさぐっている。

しかし、どうやって成功するか、どうやって他人を押しつけるか、どうやって勝つか、どうやって強くなるかっていうハウツー本やセミナーなんかはいっぱいあるけど、どうやって共生していくか、弱い人間同士がいろいろなかたちで相互依存し合いながら共同体をつくりあげ、そのなかでどうやってハッピーに生きるか。そのためのノウハウについては、多分教えられた経験がほとんどない。家庭でも、学校でも、どうやって他人と共に生きるのかっていうことに対して、真に教えられていないような気がするのです。

ぼくにはもう200人くらい弟子がいるんですけど、10年くらいやっていると独立して自分で道場を持ちたいっていう人もでてきます。そんな弟子の一人が、女性なんですけど、芦屋に子どもたちのための道場をつくった。そしてしばらくしたら、ぼくのところに、先生子どもたち相手にどんな稽古をしたらいいでしょうかって聞きに来たんです。いままでずっと大人たち向けの稽古をしてきたけど、6歳とか

ンする力なんです。

よく引かれる例ですが、人類が誕生して間もないころ、野生の肉食獣なんかと遭遇したとき、人間に、素手で野獣を殴り殺すか、あるいは走って振り切るほどの身体能力はない。そんな能力を身につけることは不可能に近い。でも、代わりに、そういう危険を回避するような能力はおそらく人間に備わっていて、しかも開発可能である。それがスキャンする力ですよ。

なんだかこつちに行くときよくないことが起こりそうとか、そんなことが先駆的というかあらかじめわかる。実際にそこに行つて経験していなくともわかる。そういう生き延びようとする人間にとつて根源的な能力が、おそらくかなり体系的に開発可能であつて、旧石器時代とかですね、人類は何万年もかけてずーっと開発・育成してきたんじゃないかとぼくは思うんです。

それが近代以降になつても、人間のなかに部分的にのこっている。いろんなところで同じことを書いたりお話ししているのこのくらいにしますが、人は危機に立たされたとき、限られた資源や起こり得るシチュエーションを事前にバーツと網羅的に掬い出すことができる。実際に何千通りもの危機的な状況を瞬時に想定して、そのなかで行動する方向や使えそうなものは何かつてことを人間は考えているんです。スキャン能力のある人は、その選択をみごとにヒットさせることができる。一見役に立ちそうもないものによつて命が救われる状況がいくら来るにちがいないつて、先駆的に確信できてしまう。

それつて、ことさらに超能力つていう必要もない。非常に細かい観察の賜物なんです。なにか目の前にある一つのもの・ことが発しているシグナルを感知する力ですよ。シグナルつていうと、いかにも目の前に具体的に存在するように思われますけど、むしろシグナルとノイズの中間つていうか、これから生じるかもしれないことの予兆つていうのが、やはりあるわけです。予兆を感知する力。スキャンというのは空間的な比喻ですが、そこに時間を入れ込んでいって起こりうることを予知する能力。それつて、基本的に観察力の一つなんですよ。



7歳の小学校に入る前の子どもたちにどう教えたらいいんでしょうつて。ぼくもそんなことやつたことないから、うくんつて考えこんでしまったのだけど、あつ、とあることを思いついて言つたんです。「アレやつたら、アレ。ハンカチ落とし」つて。

みなさん「ハンカチ落とし」は知つてますよね。ぼくも昔やつたことがある、子どものときに。何人かで輪をつくつて、みんな内側を向いて座る。オニが一人その周りをぐるぐるまわつて、誰かの後ろにハンカチを落とす。ハンカチを落とされて、オニがあと一周まわつても気がつかなかったら今度はその子がオニになる。

このゲーム、最近はやつたことのない人がほとんどかもしれませんが、どういう力を養うゲームかという点、ハンカチは後ろに落ちるから見えないし、音も聞こえない。にもかかわらず、勘のいい子は、オニがハンカチを落とした瞬間反応するんですよ。視覚でも聴覚でも、触るわけじゃないから触覚でもないはずなんですけど、いったいどのような感覚で反応するのか。なにか非常に微細なシグナルに反応するわけ。やはり、ある子の後ろに来て、ハンカチを落としてオニにしてやろうという心に「ふっ」と兆した思念というか気持ちちが微かなシグナルとして発信されているんですよ。実際に、ごくわずかにオニの歩みが遅れるとかだけでなく、微妙に汗をかくとか、脈拍が高まるとか、体臭が変化するとかそういう微細な生化学的な変化が生じるんじゃないかと思うのですが、それを感知する。そういう訓練を飽きもせずやつてみてはどうか。

スキャンする力——予知する能力

子どものころにする遊びつて、みんなそういう訓練になつていような気がします。隠れんぼなんかもそうでしょう。隠れんぼというのは、よくよく考えてみるとかなり理不尽な遊びです。隠れている人は見えないわけで、もちろん音も出さない。見えないし聞こえないし何の兆候がないにもかかわらず、オニは人が隠れている場所を感知する。すごく感度のいい子だつたら、場合によっては上空からバースアイの視点で見て、木の後ろに隠れている友達まで感知できていられるかもしれない。これ、すごく重要な能力です。この能力は一種のスキャ

人類にあえられた太古からの宿題

先日ある取材で質問されてその場でパツと思つたんですが、武道をずつと稽古してきて、また教育者として長年やつてきて、今自分にとつていちばん大切なことは何かつていうと、モニターするつてことなのです。それもこのスキャンとか観察とかと連関してくるわけです。

今日のテーマでいうと、前にも三砂先生とお話しているときちよつと思つたんですけど、赤ちゃんを抱いているとき赤ちゃんがおしつこしたいのがわかるつていうのは、自分がそうしただくなるんですよ。多分、そうだと思う。感覚の一致つてそういうものなんです。身体感覚がひろがつて、自他が包み込まれてきますと、相手を感じているというより、自分が感じるんです。

ぼく自身が武道の稽古をやつてきて、その一方でフランス思想、エマニュエル・レヴィナスという哲学者の他者論、主体論とかを30数年やつてきて、結局追求しているのは同じ問題。主体という概念をどうやつて改鑄していくか、また他者という概念をどうやつて解きほぐしていつて、主体と他者を包含するようなある種の共生体をどうやつて立ち上げていくのか。それをどのようにコントロールしていくのか。これはもう、個人を超えて人類にあえられた太古からの普遍的な宿題であつて、それをずーっと引きつづけているのです。

近代になつてそういう人類的課題をわれわれは忘れがちなわけですけど、ある種の危機の時代、窮乏の時代に至つた今、そういう根源的な人間の力の再発見が求められているのではないかと。ぼくばかりではなく、三砂先生や、たとえば実際に「おむつなし育児」を実践してみようかなつてふと思つた方々たちも、そんな方向に軌道を修正しようとしていられるでしょう。あちこちで同時多発的にぼこぼこつと泡が沸き立つように、共通の志向が現れている。そんな大きなトレンドのなかに今私たちはいるのかなというところが、今日のみなさんの発表や発言を聞いて感じることです。

ご静聴ありがとうございました。

相互扶助、自然との共存、情報の共有化

●川崎恵津子(トヨタ財団プログラムオフィサー)

2009年10月15日(木)トヨタ・オートサロン・アムラックス東京5階アムラックスホール(東京・池袋)にて、2009年度研究助成プログラム・アジア隣人プログラムの助成金贈呈式を開催しました。

本イベントは、三部構成で行われ、第一部では「こころの豊かな社会の実現に向けて」と題してシンポジウムを開催し、助成プロジェクト3件の趣旨と活動にかける気概が語られました。

「相互扶助」に基づいたよりよき隣人との付き合い

まず、2007年度アジア隣人ネットワークプログラム助成対象者である菅波茂さん(AMDA理事長)から「世界平和に貢献するアジア隣人『相互扶助』ネットワークとしてAMDA多国籍医師団——尊敬と信頼に基づいた多様性の共存」プロジェクトの報告がありました。

AMDAはこれまで紛争地域や自然災害地での医療活動を実施してきましたが、この活動の根底にあるのが「相互扶助」という考えです。財団の助成プロジェクトは、AMDAの相互扶助ネットワークを南西アジアと中央アジアで強化することに役立ちました。「相互扶助」は世界の8割の人たちが共有



菅波 茂
AMDA理事長

「相互扶助」に基づいたよき隣人の付き合いをするためには、お互いに助け合う信頼関係を築くこと、ローカルイニシアティブを発揮してもらい、それを支えること、そして、世界の8割は血縁共同体社会であり、その人々とのように付き合っていくのが重要であるといえるでしょう。

アジアの鎮守の杜を共同で調査し発信する

次に2007・2009年度研究助成プログラム対象者、李春子さん(神戸女子大学非常勤講師)による「アジアにおける鎮守の杜の資料化——鎮守の杜の文化誌的図鑑」プロジェクトについての報告がなされました。

「鎮守の杜」は日本でよく見かける風景ですが、アジアにおいてもそれはおそらく人間社会が社会を取り巻く自然環境を固有の宗教感覚、畏敬、自然に対する謙虚さを空間的にあらわしたものであり、命あるあらゆるものがつながりとして営まれることが風景として表れているのではないかと思っています。

2007年度の助成では、アジアの鎮守の杜の地図を作成しました。鎮守の杜には、洪水の際にご神木の枝を切つて堤防をつくつて守つたという記録や、最初に村を開いたというご先祖様を祭るところに木を植えたなどのさまざまな言い伝えがありますが、このような鎮守の杜が現在、環境変化や都市化の影響で伐採の危機にさらされています。



李 春子
神戸女子大学非常勤講師

2009年度はアジア3カ国25名での共同研究として、アジアの韓国、台湾、日本にあ

できるコンセプトです。本来は知っているもの同士の閉じられたものでしたが、阪神淡路大震災をきっかけに、時間軸の入つた開かれた相互扶助のコンセプトが浸透するようになってきました。今、なぜ人を助けるのかというところ欧米の「ヒューマンライツ」の考え方が世界標準ではありますが、アジア・アフリカ・中南米では困つたときはお互いさま、という「相互扶助」がいちばんわかりやすい言葉となっています。AMDAは災害医療援助を実施していますが、同時にこの開かれた相互扶助というメッセージを世界に発信しているのです。

「相互扶助」に基づいたよき隣人の付き合いをするためには、お互いに助け合う信頼関係を築くこと、ローカルイニシアティブを発揮してもらい、それを支えること、そして、世界の8割は血縁共同体社会であり、その人々とのように付き合っていくのが重要であるといえるでしょう。

鎮守の杜を各100カ所ずつ調査して、図鑑を作成し、社会に発信しようとしています。このプロジェクトには植物学者、民俗学者、民間NGO、行政の人にも調査に加わってもらいます。このプロジェクトは、アジアにおける自然と人間が共存してきた豊かな人間社会を再認識することにはなっていないかと考えています。それは、自然と人間社会のユニバーサルなものを追求することであり、自然と人間における共感が人間社会をより豊かにしていくことにつながるのではないかと思っています。

ローカルで考えたことをグローバルな基盤で展開していく

2009年度研究助成プログラム助成対象者となったモンテ・カセムさん(立命館アジア太平洋大学学長)による「気候変動によって危険にさらされたコミュニティの活性化——日本とニュージーランドでの醸造用ブドウ農家の研究」プロジェクトの概要についての報告が行われました。

気候変動が作物に影響を与え、その作物は途上国の人々の生業につながるという意味で、気候変動と農作物の関係は世界中の課題となっています。そのなかで、気候変動がワインの味をどう変えるかという点に焦点を絞りました。鍵になるのはブドウです。ブドウは人間と長い付き合いのある作物であり、ある一定の気候帯の中でしか生育しないということから、気候変動と農作物の関係を見るのにふさわしいのではないかと考えました。このプロジェクトでは、気候変動の農作物

思いやり、交わり、支え合う、豊かな社会の実現を願って

第二部は助成金贈呈式が行われました。冒頭、当財団理事長遠山敦子より「研究助成プログラム、アジア隣人プログラムは、ともにグローバル化の進展によって日々変化する、わたしたちのくらしのこの大切さを、共通の問題意識として掲げています」と両プログラムについて述べ、「人と人との確かなつながりのなかから生まれる皆様方の活動や研究の成果が、思いやり、交わり、支え合うこころの豊かな社会の実現につながることを心から願っています」と助成対象者の方々に激励のメッセージが贈られました。

第三部の懇親会では、アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」選考委員長の松原正毅先生による乾杯のご発声のあと、参加者によるお互いの活動紹介や活発な意見交換が行われました。



助成金贈呈式(左は遠山理事長)

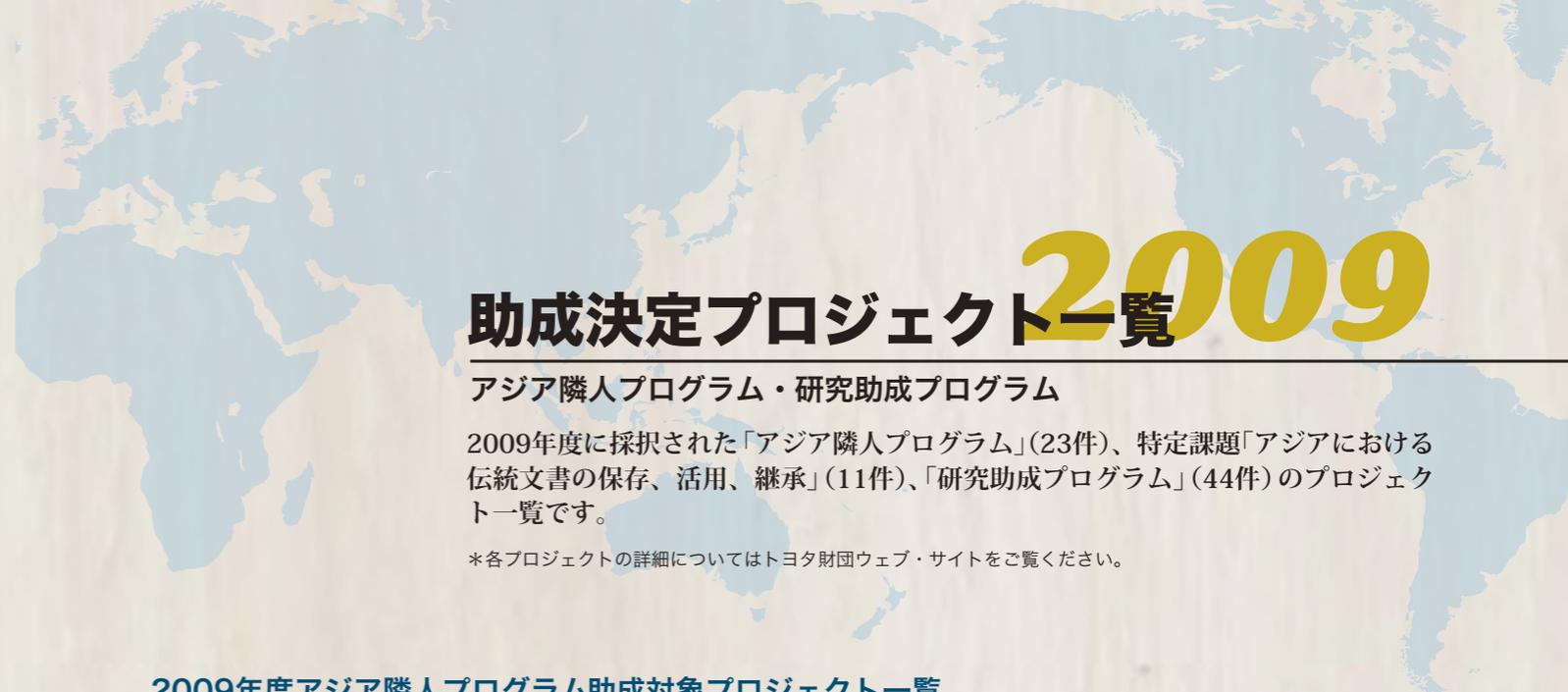
への影響を畑レベルで見えるために、計測器を使ってさまざまな場所で農業を把握するとともに、その地域ごとの慣習や伝統的智慧を考慮に入れて、ブドウの収穫後の酒造りや貯蔵・流通、消費の段階での行程ごとに解析します。



モンテ・カセム
立命館アジア太平洋大学学長

中心にある考えはThink Globally, Act Locallyではなく、Think Locally, Act Globallyです。ローカルで考えたことをグローバルな基盤で展開する努力をしたら、もっと面白くなるのではないか、ということなのです。そのため、地域で集めた情報をグローバルに人々がシェアできるようにしなくてはなりません。それらの情報を可視化するためのシステムも構築していきたいと思っています。

それぞれの発表のあと、伊奈久喜さん(日本経済新聞論説副委員長)からコメントをいただき、会場からの質疑応答がありました。出席者にとつてはすでにプロジェクトを実施している方たちからの熱い思いや、ノウハウがこれからの活動のヒントになったことと想われます。



助成決定プロジェクト一覧 2009

アジア隣人プログラム・研究助成プログラム

2009年度に採択された「アジア隣人プログラム」(23件)、特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」(11件)、「研究助成プログラム」(44件)のプロジェクト一覧です。

*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

2009年度アジア隣人プログラム助成対象プロジェクト一覧

代表者氏名	題 目	所 属	年数
アジア隣人プログラム[小規模]			
伊能まゆ	先祖から受け継いできた在来の稲を取り戻す — ヴェトナム山岳地域に住むムオン民族の挑戦	Seed to Table (ひと・しぜん・くらしつながる)	2年
大谷賢二	カンボジアの地雷原跡地における持続可能な農業支援 — 雨季の雨水のみに頼り、米の収量が1t/haにも及ばない地域での、稲作指導及び農業用水路建設を中心とした村落開発	カンボジア地雷撤去キャンペーン	2年
綾部真雄	「銀の蝶」プロジェクト — タイ山地民リスによる土着の叢智を通じた「麻薬禍克服ネットワーク」の構築	首都大学東京人文科学研究科	2年
ディマンチェ・ロン	カンボジア農村コミュニティにおける持続可能な有機農業の支援・自助ネットワークの形成	農村部のエンパワーメントとコミュニティ・ヘルスのための情報科学	2年
マノ・バット	地域に根ざしたガンジス川源流の保全 — インドの4億人の水源	ヒマラヤ地域社会における研究・アドボカシー・コミュニケーション	2年
アジア隣人プログラム[一般]			
稲川孝子	プロの技術者より製パン方を伝授するプロセスを通して、カンボジア貧困層青少年の自立と基本的人間育成を目的とする協働プロジェクト	FMA 国際ボランティア VIDES JAPAN	2年
中地重晴	タイ東部工業地域 Ma Ta Phut での工業団地と共存できる地域づくりのあり方の検討とリスクコミュニケーションの実践	環境監視研究所	2年
沼田千好子	カンボジア農村に住む知的障害者の収入創出事業 — カンボジアで初めての食用油(ひまわり油)の製造販売	(社)日本発達障害 障害福祉連盟	2年
コムサン・チャイ・タウィープ	持続的で豊かな社会づくりを担うアジア次世代リーダー育成のための研修プログラムの開発 — タイ・日本・フィリピンを中心とした農村若手活動家の交流・発展を通じて	カオデー農園	2年
功能聡子	社会的投資プラットフォームの構築、及び、相互支援コミュニティの醸成	カンボジアの社会投資基金	2年
松原あけ美	絵本で繋ぐ心の架け橋「こころの教育を世界の子どもたちへ」 — 絵本道徳授業をカンボジアの教育現場に	京都教育大学附属京都小学校	2年
原田 公	カンパール半島の伝統的生業と文化を維持・発展させるためのエスニック集団のネットワーク形成 — 大規模森林開発による環境影響を低減させるための地域組織化とキャパシティ・ビルディング	熱帯林行動ネットワーク	2年
ブントーン・ゲオブアラ	郷土民謡「ラム」一座の地域間交流、および日本人愛好家・実践家たちとの交流と協働によるラオスの「ふるさと文化」活性化の試み — 南ラオスの2大祭、在ラオス日ラオ友好事業参加を足掛かりに	民謡一座「ドクファーベツト」	2年

代表者氏名	題 目	所 属	年数
アジア隣人プログラム[一般]			
広若 剛	アジア自然農業普及プロジェクト — インド、インドネシアの現地NGOおよび農民組織と連携した技術マニュアル出版・普及と農民トレーナーの育成	アジア・コミュニティ・センター21	2年
延藤安弘	自立共融的居住文化の継承と再創造 — 台湾原住民参加による部落集住計画・育成ネットワーク	愛知産業大学大学院	2年
中西正司	フィリピンにおける障害者自立生活センターを中心とした介助者派遣活動支援 — 介助者派遣サービスの構築・実施と介助研修ワークショップの開催	ヒューマンケア協会	2年
藤岡朝子	「日中タイ映画道場」 — ドキュメンタリー映画をめぐる交流ワークショップを通じた各地の映像制作者・上映者のコミュニティ形成	ドキュメンタリー・ドリームセンター	2年
ヘン・インチェン	アジアにおける結婚移民女性の新しい市民権獲得に向けた結婚移民グループの地域協力	新しいオルタナティブに向けたアジア地域交流	2年
シャック・タンビル・ホシャイン	合鴨農法を取り入れた住民参加手法を通してのバングラデシュの地域の生活改善	農業環境課、持続的な人的開発センター	2年
ジャックリン・ポロック	労働移民に関するメコン流域の語彙 — メコン流域での安全な移住に向けた地域ネットワーク構築と相互理解の促進	移民支援プログラム財団	2年
バントム・シディ・プリヤンドコ	伝えたい生活様式 — インドネシア、カリマンタンにおけるダヤック農民ネットワークの強化と拡大	南・東南アジア非木材製品交流プログラム	2年
ジェーン・マリー・ハウ	良き隣人としての東ティモールとインドネシア — 伝統織物工芸を通じた人と文化、環境のつながり再構築	バリ文化愛好家財団	2年
ヨギタ・メーラ	小規模農業者のための持続的、協働的な農業ビジネス・エコシステムの開発	エネルギー資源研究所 西部地域センター	2年

特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」			
ガナナス・オバイセケレ	南インドからスリランカへの民族移動の複合的説明を含む、国と地域の地理(地誌)に関する貝葉文書の収集、翻字、および翻訳	スリランカ民族学国際センター	1年
加藤 博	エジプト西部砂漠・オアシス地方における地方文書の収集	一橋大学大学院経済学研究科	2年
ユシャオ・ロン	貴州省モン族の混農林業契約に関する清水江文書群の目録作成、翻字、解題、および集成	貴州大学人文学部	1年
李恵 燕	韓国済州島の伝統文書の調査・集成・保存	東北芸術工科大学東北文化研究センター	2年
廣田律子	中国湖南省藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承	神奈川大学経営学部	2年
上村 明	遊牧民が描いた郷土の景観 — モンゴル古地図のデジタル保存とデータベース・ウェブサイトによるその利用と継承	東京外国語大学外国語学部	2年
鄭 勝謨	韓国黄海岸における近世・近代海村文書の歴史生態学 — 忠清南道洪城郡星湖里文書の整理・解題	(社)地域文化研究所	2年
四日市康博	イラン・中国・日本共同によるアルダビール文書を中心としたモンゴル帝国多言語複合官文書の史料集成 — 多民族・多言語社会の構造と官文書上のペルシア語・アラビア語・トルコ語・モンゴル語・漢語の相互関係の解明を目的として	九州大学人文科学研究院	2年
却日勒扎布	内モンゴル西部地域における民間の土地契約文書の調査・保存・解題	内モンゴル大学モンゴル学学院	1年
シンギ・トリ・スリスティヨノ	インドネシアにおける平和なイスラームの創出 — デジタル化、マイクロフィルム化、翻字、翻訳、文脈づけを通じたナスカ・ランバン(ランバン文書)の保存	ディボネゴロ大学アジア学センター	2年
吉原直樹	バリ島に残存するヒンドゥー法典「アウィグ・アウィグ」の収集・整理と保存・継承 — 伝統文書の比較歴史社会的解読と再定位の試み	東北大学大学院文学研究科	2年

(特活)は特定非営利活動法人の略

代表者氏名	題 目	所 属	年数
研究助成プログラム[共同]			
木村 亮	アフリカ農村部の草の根ヒーローたちが地域を元気にする！ — アフリカ農村部住民の中で芽生えた自分たちで自分たちの道を直すという意識と自信を、地域の活性化につなげる手法の開発	京都大学産官学連携センター	1年
木多道宏	ブダベスト第7区 Jewish Quarter における「共生」の歴史の掘り起こしと、文化を継承する都市デザインモデルの提言	大阪大学大学院工学研究科	2年
長岡智寿子	村の女性に文字は必要か？ — ネパールにおけるコミュニティラジオ放送活用の学習プログラム研究	法政大学キャリアデザイン学部	2年
相川陽一	非農家出身者の農業者への育成と地域定着に向けたモデル構築 — 千葉県成田市および周辺地域のケーススタディ	一橋大学大学院社会学研究科	2年
門田岳久	コミュニティ・ハブとしての「廃校」再利用プロジェクト	東京大学大学院総合文化研究科	2年
岩淵成紀	田んぼの生物多様性パラタクソノミスト(準自然分類学者)シナリオ化による生きもの調査評価手法の開発と地域主体の田んぼの生きもの認証制度の開発	(特活)田んぼ	2年
田中 優	住宅と CO ₂ 市場で日本の林産地域を復活させる — 「住」における地産地消メリットの可視化および CO ₂ 削減の市場化による、林産地活性化、職人技術継承発展、住宅のエコと健康化	天然住宅バンク	2年
李 浩	韓国住民参加予算制度の施行過程の評価及び活性化案の模索	草の根自治研究所イウム	2年
ウィリアム D・ダビエス	インドネシア、マドゥラ人の民間伝承に関するDVDと印刷物の制作	アイオワ大学言語学部	2年
ヤマモト・ルシア・エミコ	変貌する在日ブラジル人・韓国人家族 — 就労と家族問題を中心に	静岡大学教育学部	2年
小峰隆夫	人口オーナスが進行する地方部における地域活性化策 — 人口減少と人口構成の変化が地方の人々の暮らしに及ぼす影響と対応策の研究	法政大学大学院政策創造研究科	2年
永井暁子	日本の地域社会特有の家族特性に関するトレンド分析	日本女子大学人間社会学部	2年
渡辺幸倫	新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録集の作成 — 顔の見える地域づくりのための基礎作業	相模女子大学学芸学部	2年
宮本律子	人間開発のための手話研究 — 日本の研究成果を活かしたアジア・アフリカの手話研究人材育成	秋田大学教育文化学部	2年
渡邊一正	若桜町春米における山村集落の現状と可能性 — 茅場から考える地域の活性化	NPO 市民文化財ネットワーク鳥取	1年
清水直美	イラン・カスピ海沿岸地方の聖所信仰と地域社会 — その現状調査と基本情報のデータベース化	テヘラン大学外国語学部	2年
金戸幸子	東アジアにおける結婚移民とコミュニティの再生産に関する研究 — 移動・家族の機能変化・ネットワークの構築	京都大学文学研究科	2年
鹿熊信一郎	アジア太平洋型 MPA (海洋保護区) システムの提示 — 漁村の多様な条件に応じた多様な MPA 設計手法の開発に向けて	沖縄県八重山農林水産整備課	2年
波照間永吉	アジアにおける鎮守の杜(モリ)の資料化 — 鎮守の杜の文化誌的図鑑・映像資料の作成	沖縄県立芸術大学付属研究所	2年
アクテール・ナスリン	南アジアにおける不規則な越境移住 — インドにおけるバングラデシュ女性移民の研究	ニューファンドランドメモリアル大学女性学部	1年
筒井 功	廃棄海藻を利用したエビ・海藻混合養殖システムの普及活動 — 生産者の立場に立った沿岸域の活性と食の安全を取り戻すために	カセサート大学水産学部	2年
ファン・ツォウ	中国の地方コミュニティでの残留児たちの健康的かつ活発な生活をめざして	四川大学公共衛生学部	2年
モンテ・カセム	気候変動によって危険にさらされたコミュニティの活性化 — 日本とニュージーランドでの醸造用ブドウ農家の研究	立命館アジア太平洋大学	2年

2009年度研究助成プログラム助成対象プロジェクト一覧

代表者氏名	題 目	所 属	年数
研究助成プログラム[個人]			
マフブブル・アラム	バングラデシュの小規模混農林業を通じた社会経済的利益、食の安全性向上、気候変動への適応	愛媛大学連合農学研究科	1年
小松太郎	紛争後社会の民族共存に資する教育制度分析 — 地域社会の再生と国民融和に向けて	九州大学大学院言語文化研究院	2年
恩田守雄	「一村一助」運動による地域の活性化 — ユイ、モヤイ、テツダイという伝統的な互助慣行の見直しと地域固有の資源に基づく互助ネットワークの形成をめざす「一村一助」運動による地域づくり	流通経済大学社会学部	1年
佐々木章晴	北海道根釧地方における、低投入持続型草地管理技術の構築による、自然環境保全及び根釧地域の持続的発展	北海道当別高等学校農業科	2年
石垣千秋	医療政策における国民・患者の参加に関する国際比較研究 — 日本と英国の患者団体の活動	東京大学大学院総合文化研究科	2年
中山大将	戦後開拓の経験からの「農」の再考	京都大学大学院農学研究科	1年
辻本勝久	中枢港湾に近接した中小コンテナ港湾の存在意義と活用方策に関する研究 — 日米欧の事例の網羅的把握と「みなとまちづくり」に向けた政策提言	和歌山大学経済学部	1年
新垣 修	「気候変動避難民」の時代 — 受け入れ地域活性化の視座	関西外国語大学外国語学部	2年
金 兌恩	多文化化する地域と新たな共同性 — 多民族・多文化教育の実践の現場から	京都大学大学院	2年
堀 ひかり	グローバルゼーションと日本文化の受容 — アニメやマンガの国外での受容の実態と将来に向けての展望	コロンビア大学東アジア言語文化学部	1年
鈴木 紀	甘さと連帯 — フェアトレード・チョコレートによる中南米カカオ生産者支援に関する研究	国立民族学博物館	2年
宮本万里	民主主義の制度化プロセスにおける環境保護政策の変容と、村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究 — 「幸福大国」ブータンの事例から	京都大学東南アジア研究所	2年
マリー・クリスティン・R・カストロ	フィリピン、北サマール州とコンボステラ渓谷における薬草に関する知識と利用の向上 — 村の薬草庭園と薬草薬局の設立を通して		1年
研究助成プログラム[共同]			
増淵敏之	1970~80年代における札幌市のサブカルチャーシーンの再確認と伝承 — マンガ作家・湊谷夢吉とその時代	法政大学大学院政策創造研究科	2年
サビハム・スビアンディ	適応性のある社会エントロピーシステム — インドネシアのパーム油プランテーションにおける経済活動と自然・社会・生態学的ダイナミクスの調和	ボゴール農業大学農学部	2年
木村李花子	草地を巡る野生動物と遊牧民の共生をめざした、エコ・コミュニティ意識の構築 — ジャンムー・カシミール州、高山草地と高山湿地を持つふたつの国立保護区を中心に	馬事文化研究所	2年
ヌルハヤティ・ラフマン	ラ・ガリゴ文化の再生 — グローバル化に向けて	ハサヌディン大学研究活動センター人文社会科学部門ラ・ガリゴ研究所	2年
キャンディド・A・キャブリド・ジュニア	気候変動対策としての人間の定住計画にグリーンアーバニズムを織り込む手法	フィリピン大学都市地域計画学部	2年
福来 寛	泣き寝入りより裁判で — 沖縄の市民が参加する裁判員裁判による沖縄の米兵犯罪の抑制・抑止効果	カリフォルニア大学サンタクルーズ校社会学部	2年
西原智昭	象牙利用に関する日本伝統文化のあり方の再価値づけとアフリカ熱帯林・マルミミゾウの密猟の実態に関する研究	野生生物保全協会コンゴ共和国支部	2年
杉山秀樹	わが国における魚醤文化の再評価のためのアジアとの比較研究 — 日本の伝統調味料「魚醤」の復活をめざして	日本魚醤文化研究会	2年

アジアの希望と幸福、そして日本の希望の再生

●末廣 昭（東京大学社会科学研究所所長）

「アジアの希望の星」という言葉をご存知であろうか。一九五〇年代から六〇年代にかけて、アメリカやソ連といった大国に依存しないで「非同盟の道」を目指したアジア諸国の指導者に冠せられた名称である。ネルー、周恩来、スカルノなどがそのように呼ばれた。

最近、再び「希望」という言葉が、アジアの現状と結びつけて語られるようになった。ただし、前向きな表現は、温家宝首相が大メコン圏(GMS)の会合で、メコン川を「希望の川」と呼んだときくらいで、むしろアジア諸国でよく使用されるのは「希望の喪失」「希望なき世代」といった、後ろ向きな意味合いの方である。両親の世代が貧困から脱却し、所得も増加し、子どもたちを大学に送ることができたのに対し、子ども世代は、大学はできたものの、希望する職にはつげず、同世代の中での格差も広がっている。そうした「希望の喪失感」が、日本だけではなく、アジア諸国の若者の間で広がっている。

日本語の希望(冀望)の語源は、中国の『後漢書・安帝記』にでてくる「望みが成就することを冀(こいねが)う」である。日本語文献では鎌倉時代の『名語記』(二二七五年)に登場し、明治時代までは冀望という表現も使われていた。

と東南アジアでは、かなり意味内容を異にする。たとえば、日本(こうふく)でも中国(シンフー)でも韓国(ヘンボック)でも語源は同じ「幸福」で、物質的に豊かな生活をまず意味し、その次に心地よい状態や幸運という意味が続く。幸福の反対語は不幸。私のところで勉強している中国人留学生は、ためらいなく「幸福の反対語は悲惨」と答えた。

これに対して、タイのスック、インドネシア・マレーシアのバハギア、インドのスカカアは、いずれも「苦からの解放」が「幸福」の第一の意味となる。それぞれサンスクリット語を語源にもち、宗教的精神的意味合いが強い。北東アジアでは幸福と不幸が対になっているのに対して、フィリピン(ラテン系)を除く東南アジアやインドでは、幸福(楽)と苦が対になっているのである。

さて、アジアの現状を見ていくときに、しばしば使われるキーワードは「民主化」と「貧困」である。しかし、私自身は、グローバル化や経済の自由化が急速に進む中で、あるいは、鳥インフルエンザやテロ事件が頻発する中で、ひとびとがいま感じているのは社会の不安定性と不確実性、そしてそれに対する漠然とした不安(将来への見通しのなさ⇨苦)ではないかと思う。しかも、多くのアジア諸国では政治の混乱が続ぎ、経済面では一九九七年のアジア通貨危機と二〇〇八年の世界金融危機という、二度の大きな危機を経験した。一九六〇年代から七〇年代に国民が共有した「国の開発」(経済成長、教育の普及、社会の近代化)という目標は、現在、「国民の幸福」(安定・安全・安心に支えられた社会の実現)へと、大きく変わりつつあるように思う。

アジアを語るとき、これまでは「アジアの多様性」が強調されてきた。民族・言語・文化の違い、政治体制の違い、経済発展段階の違いが強調され、それゆえにこそ、「多様性の中の協力」が主張されてきた。ASEAN加盟国が

「希望」という言葉を『日本国語大辞典』で調べると、「あることが実現することを待ち望むこと。また、その気持ち」と「将来への明るい見通し」の二つの意味を掲げている。ユニークな辞書として知られる『新明解国語辞典第六版』の説明は、「自分がこう成りたい、人にこうしてもらいたいとよりよい状態を期待し、その実現を願うこと」となっている。つまり、現状に満足せず、いま以上の状態を望む能動的な気持ちを意味し、何らかの行為を通じて望みを達成することを含意しているのである。オバマ大統領の演説の中で、「ホープ」と「チェンジ」が抱き合わせて語られることが多いのは、英語圏においても、希望という概念が自分自身や社会の変革と結びついているからであろう。

ところで、二年前にアジア諸国で使われている「希望」という言葉を調べていて面白い事実気づいた。日本を含む北東アジアでは、日常会話にも政府の政策内容にも「希望」という言葉はでてくるが、東南アジアでは、政党や政治団体、政府の政策には、ほとんど「希望」という言葉がでてこないのである。むしろ、政府や政治家が好んで使うのは、「国民の幸福」「社会の幸福」という言葉の方である。そして、この「幸福」という言葉は、北東アジア

つて「思いやりのある社会」を目標に掲げたのも、お互いの違いを尊重したからにほかならない。しかし、いまのアジアは等しく、グローバル化の波に翻弄され、気候変動やテロという共通の脅威にさらされ、少子高齢化、ストレス社会の到来、家族制度の崩壊という共通の社会問題に直面している。日本が抱える問題と基本的に同じなのである。

日本が経済大国、技術先進国としてアジア諸国に支援の手を差し伸べることはもちろん重要である。アジアに投資先と市場を求め、アジアから優秀な学生と企業家精神にみちた若い経営者を確保することも必要であろう。しかし、いま日本に最も求められているのは、共通の問題に苦しむアジアと同じ目線で、現実のさまざまな課題に協働して取り組むことではないかと思う。そのためには、アジア諸国・地域の固有の制度や文化を探る研究だけではなく、共通の課題とその解決方法を模索するアジア諸国との共同研究こそが何より不可欠だと感じる。

「将来への明るい見通し」(希望)を取り戻し、「世界の不確実性と不安定性への不安(苦⇨煩惱)からの解放」(幸福)を実現するために、さまざまな試行錯誤を重ねてきた日本の経験と智慧(タイ語のパンヤー、日本では般若。語源は同じサンスクリット語のパンニャ)を、いまこそアジア諸国に向けて発信すべきではないのか。それが日本の責務であると同時に、日本における希望と活力の再生につながるかと、私自身は信じている。

●すえひろ・あきら

一九五一年鳥取県生まれ。東京大学大学院経済学研究科修士。経済学博士。アジア経済研究所、大阪市立大学をへて、一九九二年東京大学社会科学研究所教授、九五年から同教授。現在、同研究所所長。タイ・アジア社会経済論専攻。元アジア政経学会理事長、現在日本タイ学会会長、『タイ 開発と民主主義』『タイ 中進国の模索』『キャッチアップ型工業化論』『ファミリービジネス論』など著書多数。トヨタ財団理事。

世代をこえて受け継がれるもの

●加賀道(トヨタ財団プログラムオフィサー)

清々しい冬晴れの朝、千葉県の行徳野鳥観察舎を訪ねた。バス停を降りてから川沿いを10分ほど歩く道すがら、あちこちからさまざまな鳥のさえずりが聞こえ、ジヨギングをする人たちはすれ違いざまに挨拶をしてくれる。東京から電車で一本の距離にもかかわらず、普段とはまるで違うそんな朝の様子に、おのずと取材への期待が一層高まった。

今回取材に協力くださったのは、行徳野鳥観察舎友の会(以下、友の会)の蓮尾純子さん。第4回市民研究コンクール(1988年)で最優秀賞を獲得した友の会の中心的なメンバーの一人である。



1986年に描かれた「2001年の保護区」。当時、ほとんど生き物がいなかった土地が、現在ではこの絵のような姿に生まれ変わっていた。

◆当時の活動概要

千葉県の浦安・行徳一帯は「新浜」と呼ばれる東京湾奥部最大の干潟の一部で、水鳥の貴重な渡来地でもあったが、1960年代の高度経済成長期にその大部分が埋め立てられてしまった。今回訪れた行徳野鳥観

らさず、汚い水が浄化されていく様子を隠さずに見せたことが、市民の巻き込みや理解につながったと思います」と答えた。このような活動の他にも、河川を汚さない石鹸作り、作った石鹸を使ってみるためのバーベキュー大会を開くなど、市民を巻き込んだ活動を展開させていったという。地道な努力によって蓮尾さんたちの研究成果が地域に広がり、根づいていったのだ。鼎談の中で、原ひろ子委員(第3、4回選考委員)は、成果は「地域の力がついていくということ」と言っていたが、まさに友の会はそれを実践していたように思える。

◆未来を描ける力

1986年に行徳野鳥観察舎10周年を記念して編まれた「すずがも通信」特集号に興味深い一枚のイラストを見つけた。タイトルは「2001年の保護区」。86年当時の新浜からは想像もつかないほどたくさんの野鳥や魚、動物たちが湿地をにぎわしている。21世紀をはるか遠い未来と想って描いた青写真だったというが、現在まさにこのイラストのような保護区を目にすることができている。イラストの上の方に顔をのぞかせている可愛らしいタヌキも2004年から実際に出没するようになり、取材当日も運よくタヌキの家族に遭遇した。淡水のある風景もすっかり定着し、多くの鳥たちが集い羽を休めている。「こうなって欲しいとは思ったけれど、まさか本当になるとは思ってもいませんでした」と蓮尾さんは笑うが、未来の姿をデザインし、それを実行してきた努力の跡は、保護区のあるあちこちに現存していた。

一方、湿地が広がったことで多様な生物が生息できるようになったかわりに、アシなどの水生植物の繁茂に見舞われ、この10年は植物との戦いに悪戦苦闘して



繁茂したアシやヒメガマを刈り取ったり根から引き抜いたりして、水鳥の休息地を確保している。ここ10年は、植物との戦い。



蓮尾純子さん

察舎一帯は、その新浜を守りたいという自然保護論者と開発を進めたい地元や行政との激しい対立のいわば折衷案として成立した場所である。埋め立てによって造成された保護区は、淡水源がないため乾燥化が進みやすく、繁殖や採餌に利用する鳥が集まりにくいという課題があった。また、保護区の前を流れるドブ川(丸浜川)は、家庭排水の流路であったため、極端に汚れていた。そこで市民研究コンクールでは、丸浜川の浄化を図ることで食物連鎖を回復し、水鳥の餌場も確保することを目指す実証実験(水車ポンプを回し、ドブ川に酸素を送り込んでの浄化実験や、水質調査など)を行った。

◆市民研究コンクルールの成果

さて、市民研究コンクルールの成果とは何だったのだろうか。昨年亡くなられた日高敏隆先生が、選考委員の鼎談(萩原なつ子著『市民力による知の創造と発展』2009)の中で、以下のような言葉を残している。「市民研究の一番の重要なところは、専門的・国際的な研究成果を上げたところではない。研究を通じてわかったいろんな新しいことが、地域に広がるというところである。大学の先生がいくらやつても広がらないことが、市民が研究することによって可能になる。しかも、それによって市民の身のまわりの認識が広まった、深まったということでしょう」

この言葉を蓮尾さんに伝えると、「ドブ川から目をそらさず、汚い水が浄化されていく様子を隠さずに見せたことが、市民の巻き込みや理解につながったと思います」と答えた。このような活動の他にも、河川を汚さない石鹸作り、作った石鹸を使ってみるためのバーベキュー大会を開くなど、市民を巻き込んだ活動を展開させていったという。地道な努力によって蓮尾さんたちの研究成果が地域に広がり、根づいていったのだ。鼎談の中で、原ひろ子委員(第3、4回選考委員)は、成果は「地域の力がついていくということ」と言っていたが、まさに友の会はそれを実践していたように思える。

◆それぞれの新浜

埋め立てられる以前の、広大でたくさんの水鳥が訪れていた新浜を知っている人たちにとって、今の新浜は「亡骸」なのだという。まるで死んでしまった子どもに会いに来るようで、胸が痛むのだそうだ。しかし、現在の保護区しか知らない人にとっては、今の新浜が原風景として心に刻まれている。東京湾に湿地がほとんどなくなった今、新浜は「市民の誇り」になっているのだ。形が変わってしまったも、世代が変わっても受け継がれるものがある。ないよりはある方がいいでしょう、と蓮尾さんは言った。埋め立て前の新浜を知っている蓮尾さんから発せられるその言葉には重みを感じられた。

◆モットーはニコニコ顔に

「私のモットーは、この観察舎を訪れたあとの帰りに誰もがニコニコ顔になることなんです」と蓮尾さんは語ってくれた。この場が癒しの空間であれば、難しいことを考えている人でも笑顔になるはずと、観察舎の前を行きかう人への挨拶を欠かしたことがないのだそうだ。ちよつと恥ずかしいけどずっと続けてきたんです、とはにかみながら話してくれた。

取材を終えた帰り道、今朝通りすがりの人から受けた挨拶を思い出した。数値で計ることはできないけれど、あの挨拶や鳥の声もまた、友の会の活動成果の一つなのだろう。冬空の下、温かい気持ちで自然観察舎を後にした。

本記事の連載終了にあたり、当時の担当者であり、ご協力をいただいた萩原なつ子さんにお話をうかがった。当時の様子や助成活動のありかたなど、萩原さんの未来へ託す思いを紹介しよう。

——当時の市民研究コンクールの思い出を教えてください。

私、ツアーコンダクターになりました。だから、選考委員の先生方を連れて現地インタビューに行くのはとても面白かったです（笑）。先生たちの個性を考えながら、調整をして、相手方に連絡をして、どこを観るかとか、そういうのがね。

——当時の資料を見ると、助成対象者と選考委員やプログラムオフィサーがつながっているというか、時にはぶつかったりと、距離感が非常に近い印象を受けるのですが……。

「選ぶ側・選ばれる側」、「助成する側・される側」といった二項対立がありませんでしたね。お互いに切磋琢磨して相互作用が生まれていました。選考委員も真剣に議論し、現地インタビューに行つてはお互いに意見を出し合う。お互いに真剣になることでモチベーションが高まっていくという相乗効果があったように思います。

——市民研究コンクールは予備研究を経て、選ばれた研究だけが本研究に進み、そのなかでも優れた研究に対して賞が与えられるという形式がとられていました。これについてどう思われますか？

当時は、選考委員の名前が公表されていませんでした。そして、選考委員が応援したい案件を表明し、応援団になり、コンクールの最中に選考委員が現地を訪れ、助言をし……公平性が重んじられる今ではなかなか考えにくいことです。でも、そのようないわば「鼻^{ひいき}肩^{かた}」を

研究コンクールを盛り上げた大きな一因でしょうね。有名・無名の問題ではなく、かつ自分の専門を超えたところでも楽しめるかどうか。これは、日高先生もよくおっしゃっていました。文系・理系を問わずにさまざまな委員が顔を突き合わせ議論を交わした選考委員会の現場は、当時30代前半だった私にとつて研究への姿勢を実地で学ぶ場でもありました。

そのような「超一流」の選考委員を選ぶのがプログラムオフィサーの役目であり、腕の見せ所でした。そのためにも、プログラムオフィサーはプログラムの目的を明確にして、何のためにプログラムを運営しているのかをきっちり認識しておく必要がありました。

——昨年お亡くなりになった日高敏隆先生（第4、5回選考委員、第6、7回選考委員長）との思い出を教えてください。

チョウ研究の権威である日高先生と、天竜村ギフチョウ研究会の現地インタビューへ赴いた時のことが忘れられません。ギフチョウ研究会のメンバーは、チョウの権威である日高先生がいらつしやるということで大騒ぎ。でも、日高委員長はいわばアマチュアの研究者に対して、研究の方法論や手法については口を出さず、むしろ自分のわからない部分をさらけ出して質問し、「なるほど、知らなかった」などと答えていました。とにかく謙虚でした。このような謙虚さは多くの選考委員が持ち合わせていたように記憶しています。

また、日高先生は予備研究の時は公平性を期すために「全部行かない」としたかわりに、本研究は「全部行く」とおっしゃって、第6、7回のコンクールではすべての現地インタビューに同行されました。

——当時の活動内容を見ても取り上げられている課題に古さを感じないのですが。

課題は、自然環境問題やまちづくり、文化の保存な

◆温 ◆故 ◆知 ◆新◆ スペシャル・インタビュー

萩原なつ子さんに聞く

1956年山梨県生まれ。立教大学社会学部社会学科教授、21世紀社会デザイン研究科教授。トヨタ財団が1988年から3年かけて実施した市民研究コンクールの「総括評価プロジェクト」のメンバーとして報告書を執筆、1991年からアソシエイトプログラムオフィサーとして、第6、7回の市民研究コンクールの企画、運営を担当した（1991年9月～97年12月）。



真剣にするなから、選考委員にも、助成対象者にもやる気が生まれていたように思います。

——鼻^{ひいき}肩^{かた}は悪いことのように思われがちですが、皆それぞれの良い面を平等に鼻^{ひいき}肩^{かた}してもらっているという形であれば、むしろ良い効果を生むのかもしれないね。

また、本研究に進めない案件もありましたが、それは一概に成果が出なかった研究というわけではありませんでした。予備研究の時点で、自立してやっていけそうだと判断された案件は、内容がとても良くても本研究へは進めませんでした。選考委員やプログラムオフィサーには、判断力や切る勇気が必要なんです。

——今と当時の助成プログラム運営の違いは何が感じますか？

当時はインターネットなんてものがなかったので、連絡はすべて固定電話か手紙でした。とにかく、時間の流れが違っていました。助成対象者とは頻繁に電話で連絡を取っていましたよ。「大丈夫」と言われても、本当に大丈夫なのか、本当は芳しくないのか、声を聞けば何となくわかりました。やり取りの多くがメールになってしまった今では、そのような機微は読み取るのが難しいですね。

それから、応募する側も、手書きの申請書を書くのは大変なことだったと思います。手書きという作業効率の話だけではなく、参加メンバーを集めるにも直接会うか、電話や手紙でやり取りするしかない。とにかく動かないとつながらなかったから、事前に話し合いを重ねた意思疎通の取れた仲間による応募が多かったような気がします。応募する側も、プログラムを設計する側も、とにかく練りに練って企画を作っていました。

——選考委員についての思い出はありますか？

「超一流」の選考委員がそろっていたことが、市民ど、今取り上げられているものほとんど変わっていません。ただ、当時はその課題に市民がどう取り組むのか、その手法を必死に考えていた時代だったと思います。今となつては一般的になったテーマだけれど、当時はその課題の芽に気がついた人たちがやつと動き出した時期でした。今では当然のように使われる「協働」などを取り入れていったのもその画期的な人たちがはしり、りでした。

この人たちはみんな、ポリシーが明確で芯をしっかりと持っていましたね。選考委員からのアドバイスにも意見を言い返せるような人たちが多かった。一方で、柔軟性や素直さみたいな、一見正対に見えるような要素もすっかり兼ね備えていました。何より危機感を持って立ち上がった人たちが多かったように思います。

——最後に、私たちプログラムオフィサーへ一言お願いします。

広告代理店は、社会の半歩先をデザインする仕事だと聞いたことがあります。あんまり進んでいると社会が付いてこれないからと。みんなが、あ、そうかなるほど、と思うくらいのことをデザインする。でも、プログラムオフィサーは10歩先のことをデザインしなければダメ。そのときにはみんながピンと来なくても、将来課題になりそうなものを先読みして助成プログラムとしてデザインすること。

募集要項の作りこみも大きいと思いますよ。トヨタ財団は何をやりたいのか、何をめざしているのか。市民研究コンクールでは、当時担当者だった山岡義典さん（現日本NPOセンター代表理事）がその点をしっかりデザインしたのが成功の一因だったと思います。プログラムオフィサーはプランナーであり、デザイナーであるべきだと思います。頑張ってください。



故・日高敏隆委員長(写真左)は、本研究のコンクールではすべての現地インタビューに同行された(写真右は萩原さん)。



写真右上が崎坂さん

愛と恵みのケニア紀行

活動地へおじゃまします! ●西田志紀(トヨタ財団プログラムオフィサー)

旅のはじめに

2009年10月の終わり、日本を飛び立って12時間、アムステルダムを経由してさらに8時間かけて辿り着いたのは、東アフリカの玄関口、ケニア共和国。正確には、アムステルダムからの經由便が「テクニカルプロブレム」なる理由で翌日までキャンセルとなったため、往路1日半という長旅から始まったケニア出張となりました。翌日の振替便には私と同じく、アムステルダムで一晩足止めされた人がたくさん乗っていて、乗客には不思議な連帯感が生まれ、ケニアという目的地がそうさせるのか、会話の弾む機内となりました。

私の左横に座った大柄のケニア人男性はアッラーにお祈りを、右横のご年配のイタリア人神父さんは胸の前で十字を切り、敬虔なお二人に囲まれたからか、今度はプロブレムなしでケニアに到着することができました。

ケニア共和国は、赤道直下に位置する人口約3980万人の国です。マサイ族の言葉で「冷たい水」を意味するナイロビを首都としています。1963年にイギリスから独立した後、資本主義体制を貫いたケニアは、東アフリカの中で最も経済的に発展した国となっています。しかし、都市部と農村部の経済格差や経済的貧困からなる社会の課題は山積みしており、2007年12月に行われた大統領選挙に端を発する部族対立が現在まで続き、治安の悪化を招いています。『地球の歩き方・東アフリカ 08・09年版』は、「現地の人が楽しそうに過ごしていたとしても公園に足を踏み入れない方がよい」「昼間でも一人でナイロビ市内を歩かないように」などの注意書きに溢れ、歩き方といながら歩くことを勧めていないのが現状です。

さて、今回のケニア出張の目的は、2008年度の研究助成プログラムの助成プロジェクト2件の調査現場にうかがうことです。1件は2年プロジェクトで、プロジェクトが始まってから折り返し地点にあり、もう1件は1年プロジェクトのため研究は完了したものの、2009年度と同プログラムにおいて新たに1年の継続助成が決定したプロジェクトです。どちらも課題の解決のために必要な「住民の意識変容・行動変容」に着目した実践型・住民参加型のプロジェクトで

ている地域です。崎坂さんのプロジェクトは、母親、妊産婦、18歳未満のHIV/AIDS孤児とその保護者を対象に、栄養改善のための効果的な介入活動方法とその効果の定量化を課題としています。研究を1年間続けてきたなかで、栄養改善のためには「安全な水へのアクセス」が欠かせないと考えた崎坂さんは、ケニアで住民参加型の「上総掘り」による井戸掘り活動を展開するNPOと連携し、井戸設置前後の利用者の行動変容調査を新たな研究項目に加えました。

今回の訪問では、井戸設置による行動変容調査の設置前アンケート調査が終了した村で、住民の方が初めて井戸から水を汲み上げる記念すべき日に立ち会わせていただくことができました。今まで水溜りや川の水を飲用としてきた人々にとって、自分たちで掘り当て建設した井戸がどれほど喜ばしいことが、井戸を囲んで、女性たちによる喜びの歌、踊り、舌を震わせて出す独特の甲高いよく通る叫び声その嬉しさを物語っていました。

残り1年の研究では、栄養改善のための啓発活動を行うとともに、アンケート調査の統計と分析を進める計画で、現地の共同研究者・協力者の方と共に、一連の介入活動の効果の定量化が図られます。

【訪問先】
ケニア共和国フニユラ
崎坂香屋子
(2008年度研究助成プログラム助成対象者代表)



【助成題目】
ケニア国HIV/AIDS罹患率の高い地域における子ども、妊産婦、母親、Guardians(保護者)を対象とした貧血対策を主とする栄養改善のための効果的介入活動についての研究

健康と行動変容：崎坂氏プロジェクト

ナイロビから国内線で北西部へ1時間弱ほど飛ぶと、キスムという町があります。ニヤンザ州の州都であるこの町は、アフリカ最大の湖ビクトリア湖のほとりにある人口約32万人の貿易都市です。今回おじゃました崎坂さんの研究プロジェクトは、キスムからさらに車で3時間ほど北へ行ったところにある隣国ウガンダとの国境にほど近い、ウエスト州の村落を調査対象地の一つとしています。調査地に向かう車窓から外を眺めると、ちょうど季節が小雨季ということもあり、緑の繁る「赤道直下アフリカ」の景色が広がっていました。どこまでも続く青空の下には、牛を連れて歩く男性、自転車の後ろに大きな荷物を括りつけ全身の力を使ってペダルをこぐ若者、頭の上に載せた荷物を見事なバランス感覚でゆったりと運ぶ女性たちが行き交い、ケニアの農村部のくらしの様子を垣間見ることができました。ここはケニアでHIV/AIDSの罹患率が最も高く、住民の5人に1人が感染し



コボレバナシ

女性の気持ちを伝える「カンガ」

●「カンガ」と呼ばれる布をご存知ですか。ケニアやタンザニア、東アフリカの女性が身にまとったその布は、服として身体に巻きつけるだけでなく、赤ちゃんのおくるみに、風呂敷代わりに……と、くらしのさまざまな場面で使われています。カシューナッツなど色とりどりの模様が描かれたこの布には、カンガセイイングと呼ばれるスワヒリ語の諺や言葉がプリントされています。女性は自分の気持ちを、この「おしゃべりする布」で表現するのだそうです。

●ここで、私が手にしたカンガの言葉をご紹介します。カンガ売りのお兄さんが素っ気ない顔で「Love is Fruits」と言いながら、その意味を教えてくださいました。

Upendo ni tunda la roho
愛は心の恵み(果実)である。

今回、この原稿を書くために「カンガ」について調べたところ、次のようなカンガセイイングも発見しました。

Rizili ni popote usichoke kutafuta
恵みはどんなところにもある。探すことに飽きてはいけない。

総じて、「愛はどんなところにもある。探し続けなさい」ということでしょうか。「ツキに見放されたらもう終わり」「お隣とうまくやらないあなたはどういう人なの」などもあり、人生の酸いも甘いも楽しんでしまう、そんなカンガに魅力を感じました。社会的に立場の弱い女性たちにとってのカンガは、厳しい環境の中で明るく暮らすパワーの源となっているのかもしれませんが。

とができました。道ができたことで、暮らしがどんなに変わったか、考えがどんなに変わったか、村の抱える他の問題も解決したいという



ているようで、喜田さんがここにこしながらその様子を教えてくださいました。農民組織 KOKWALUK Youth Group が率いる村では、村の方の発案で私のために歓迎会を開いてくださいました。平らで歩きやすい「土のう」による整備が済んだ道沿いにある広場で、女性たちによる歌と踊り、心こもった歓迎の詩やスピーチをいただき、素敵な時間を一緒に過ごすこ

村の方の気持ちが伝わってきて、私もうれしくて前向きな気持ちになりました。皆さんのスワヒリ語でのスピーチでは、私の名前「ニシダ」がよく登場したため何でだろうと思っていると、「ニシダ」は「問題です」という意味なんだよと、村の方が笑いをこらえながら教えてくださいました。私も即席のスワヒリ語で「私、にしが問題にならないのですが……」などと調子に乗って自己紹介をしたのですが、会話の糸口となる「ニシダ」に感謝をする一日となりました。2009年11月から再び始まった研究プロジェクトでは、道路整備の技術を取得し自信を得た住民が、いかに他の機関と連携して農業振興、生活改善といった地域の課題にアプローチしていくか、また、アプローチに対する諸機関の反応を検証することが課題として挙げられています。「モットアイナイ」のように「ドノウ」という日本語が定着し、住民が一体となって村の課題に取り組む姿を拝見して、プロジェクトの1年後をとっても楽しみにケニアを後にしました。最後に、ケニア出張でお世話になった皆さんにお礼を申し上げます。アサンテ・サーナ……。

木村氏のプロジェクトは、2008年度研究助成プログラムの1年プロジェクトとしての研究期間を終え、昨年11月から開始した2009年度の1年プロジェクトとして新たに継続助成が決定しました。この研究は、「土のう」を用いた簡便な道路整備手法が、いかに住民の潜在意識に働きかけ地域の課題解決につながるか、課題解決に向け、はじめの一步を踏み出すための手法を「農」と「工」の視点か

ら模索するものです。これまでの研究で、「土のう」による道路整備の有効性と住民の潜在意識の活性化が行動変容に繋がるということが報告されています。今回、研究実施地である4カ村におじゃましました。ケニア共和国エルドレットでは、近くに市場があるにもかかわらず、悪路のために買い付けのトラックが村に入ることができないため、せっかくな収穫した野菜が腐ってしまうケースがあったとのこと。木村さんから研究チームの「土のう」という視点は、「農」と「工」から人の暮らしに必要な「道」の課題を捉え、また、そこに暮らす地域住民の心も捉えていました。このことは、現地で24時間全てをこの研究に費やしている喜田さんの今まで培ってきた経験や人柄、また他の共同研究者の方の姿勢によることも大きいのではと感じました。4カ村におじゃましましたが、ここが悪路だったとは思えないほど歩きやすい道に生まれ変わり、案内をしてくださった農民組織のリーダーは皆さん誇らしげに説明をしてくださりました。自分たちで道を直せるという話に、はじめは半信半疑だったこと、作業に加わったのはリーダーだから仕方ないかな……、という理由から乗り気はしなかったが、どんどん整備されていくとメンバーが増え始め、村の人たちが自分たちを見る目も変わってきたこと……。村で優先順位の高い道を直し終えると、次へ次へと自分たちで別の道の整備にとりかかっ

道と行動変容：木村氏プロジェクト



【訪問先】
ケニア共和国エルドレット
喜田 清
(2008,2009年度研究助成プログラム
助成対象者。代表は木村亮)

【助成題目(2008年度)】
『アフリカの農村が自ら豊かになるために
——日本の地域社会を支えてきた精神と農
工技術を正しく地域住民へ移転すること
により、人々の潜在的活力を引き出す手法の
開発』

た。次におじゃまさせていただいたのは、ナイロビから飛行機で北へ1時間弱ほどの距離にあるエルドレットという町を拠点に展開されているプロジェクトです。京都大学産官学連携センターの木村亮教授がこのプロジェクト、現地エルドレットでは、共同研究者で現地の指揮を執っていたらっしゃるNPO道普請人副理事の喜田清さんと共同研究者の方が迎えてくださいました。



写真中央が喜田さん



写真左が板東さん▶
ベトナムの母子健康手帳▼

JOINT
ホット・インタビュー

助成対象者／板東あけみ

好奇心と協調性が人を動かす力

●聞き手：楠田健太(トヨタ財団プログラムオフィサー)

板東あけみさんは、日本の公立小学校で、先年早期退職するまで約30年にわたって、特別支援学級を担当するカタワラ、1990年からベトナムで子どもたちへの支援活動を積極的に続けている。トヨタ財団では2006年から現在に至るまで、板東さんを代表者とする、ベトナムで母子健康手帳を全国に広めるプロジェクトに対して助成を行っている。典型的な関西の「肝っ玉母さん」のイメージそのままに快活でエネルギーッシュ、特技は誰とでも仲良くなることという板東さんに、プロジェクトに懸ける想いを聞いた。

そもそも板東さんが、ベトナムで活動を始めたきっかけを教えてください

小学校の教師をしていた私は、1990年の春休みを利用して初めてベトナムへ一人で行きました。私は障がいのある子どもたちの教育に長年携わっていたので、途上国の障がいのある子どもたちに興味があったのです。その時は単なる好奇心で出かけたので、20年後にまさか自分が国際協力を専門とすることなどまったく予想もしていませんでした。人生はどこにターニングポイントがあるかわかりませんね(笑)。

このとき、南部のメコンデルタにあるベンチエ省に行つたのですが、当時ベンチエ省にはまだ電気が来ておらず、私には驚きの連続でした。このベンチエ省で私を動かした大き

に自分は情報を知っていても、心では途上国の厳しさをわかっていなかったと思ひ知らされたのです。この日本との格差の大きさに愕然としたのが1つ目ですね。

2つ目は、ベンチエ省の副知事さんや保健局の方々の省民への深い思いと努力ですね。彼らは1989年に政府からの指示なしで自発的に障がいのある子どもたちの実態調査を行い、そのあまりに厳しい生活環境に胸を痛められて毎月自分たちの給料から寄付をしたり、ほかの方にも寄付を訴えて、障がいのある子どもたちのための学校建設資金を作ったりしておられました。その篤い思いに心を揺さぶられました。

この2つの経験で「私も同じ地球上で同じ時間を生きている一人の大人として」その活動に協力をさせていただきたいと思つたんですよ。そして帰国後「ベトナムの子ども達を支援する会」(以降「会」)を作りました。

母子健康手帳の導入は、どのような経緯で行われたのですか？

私が会をたち上げ、活動を始めた当初は、自分の専門である障がい児教育の支援を主に行っていたのですが、次第にいろいろな職種の人たちが共感して入会してくださったのですね。本当に心丈夫でした。医療専門家の人たちと共に接した障がいのある子どもたちの中に、妊娠期や新生児期に適切な処置が取られていたら障がいの発症が防げたかもしれないというケースが多々見受けられました。また障がいの確認時期を保護者や村の診療所の

職員に尋ねても、いつごろかよく分からないというケースも多々ありました。そこで会の医療専門家の人たちと共に、ベンチエ省での母子健康手帳導入は大変重要であると考え、ベンチエ省人民委員会(地方行政機関)に日本の母子健康手帳を見せて、これを参考にベトナム版母子健康手帳を作らたらいかでしようかという提案をしたのが、1998年だったのです。

1998年の7村での試行利用から毎年少しずつ使用村を増やしましたが、これは会が村の診療所の母子保健に関する医療機材の寄付と合わせて母子健康手帳の印刷費を寄付していました。2003年にベンチエ省人民委員会は、母子健康手帳は役に立つということがよくわかったので、これからは印刷費を自己資金でまかないますという、途上国としては驚くような申し出をしてこられました。国際協力の成果の一つのポイントは、サステナビリティ、つまり現地に根付いて定着していくことですが、まさにそのモデルのようになりました。そしてとうとう2004年に人口134万人の省内全域160村で母子健康手帳が使用されるようになったのです。これは本当にうれしかったですよ。

でも、良いのか悪いのかわかりませんが、私つて一つの目標に達したら、そこに満足しないですぐに次の目標を考えてしまう性格なんです。それで、ベンチエ省で母子健康手帳を使う事業が増えるにつれて、これをベトナム全国に広げたらきつともっと大きな力になるのではないかという途方もなく大きな夢

ほんとう
板東あけみ(2006・2008年度 研究助成プログラム助成対象者代表)

【題目】モデル地域での活動経験を全国展開に活かす方法論の開発——ベトナム保健省版全国用母子健康手帳普及プログラム

【助成額】400万円(2006年度)／450万円(2008年度)

【助成概要】ベトナムでは、日本のNGO「ベトナムの子ども達を支援する会」との連携のもと、1998年からベトナム版母子健康手帳を開発し2004年には南部モデル地域であるベンチエ省内の全域で普及するに至っている。本プロジェクトでは2006年度から、ベンチエ省での活動を活かし、母子健康手帳をどのように全国に展開していくのかという方法論について研究を行った。次いで2008年度からは、北部のハーザン省をモデルとし、より多くの機関の協力が不可欠となる山岳少数民族地域での普及を目指すとともに、地域のネットワークの強化が母子保健改善に果たす役割について研究を行っている。本プロジェクトは、今後ベトナム全国、更には識字率の低い他の途上国でもスムーズに母子健康手帳導入を伴う母子保健改善事業を行う方法論の開発をめざす実践的研究である。

を持ち始めたのです。以来、ハノイに行くたびに保健省の国際課や母子保健課へ足を運んで母子健康手帳の説明をするようにしました。当時の保健省の母子健康手帳への関心はさほど高くはなく、ベンチエ省への母子健康手帳に関する視察すらなかなか実現しませんでした。紆余曲折を経て、それがようやく実現したのが2006年でした。

トヨタ財団の研究助成を受けたのもこの年からですね？

このような私をいつもご指導くださったという大阪大学の中村安秀教授は、1998年以来、4回にわたって母子健康手帳について話し合う国際会議を開催されました。

私はタイで行われた第4回の会議に出席した際に、ベトナムでの開催がベトナム保健省への大きな刺激になるという判断をして、ベンチエ省人民委員会の代表と相談して、中村安秀先生他この国際会議の中心的なメンバーの皆様に、第5回はベトナムで開催してくださるようお願いしました。



①ハーザン省の保健局による母子健康手帳の説明会
②調査村でお母さんと話す板東さん
③母子健康手帳を大事にもっている少数民族のお母さんたち

その結果、実現の方向で動き出したのですが、やはりベトナム国内から多くの方々を招待するのは多大な経費がかかります。そこでこのシンポジウムに保健省他政府幹部や他の省の保健局幹部を招待する資金のため、トヨタ財団の研究助成プログラムに応募して、幸運にも助成をいただきました。これは本当にありがたかったですよ。もしこの助成金があれば、多分今のようなベトナムにおける母子健康手帳の急速な発展はなかったと思いますね。

このシンポジウムは世界10カ国160人の参加で熱心に討議が行われたのですが、期待通りベトナム保健省へは大きな3つのインパクトがあつたと思います。1つ目は近隣諸国の母子健康手帳への熱心な取り組みを知ったこと、2つ目はベンチエ省の全村で活用されて浸透していたことを知ったこと、そして3つ目はこのシンポジウム後にいくつかの他の省から自分たちの省でも使いたいので保健省で取り組んでほしいという声が上がってきたことです。

私はこのシンポジウムの時に参加した各省保健局代表に現状調査を行いました。ベトナム全体の約3分の1強の23省が協力してくださいました。調査では、そのほとんどの省が母子健康手帳のようなまとまったものではなく、事業ごとに1枚物のカードやあるいは数枚のうすい記録する

がベンチエ省他いくつかの今まで訪問した母子健康手帳を使用している村々では、母子健康手帳の導入で、村の人たちのネットワークが強くなるのを感じていたのですね。特に教育レベルの低いお母さんたちには、村の人たちのサポートが不可欠です。

私はこの副村長さんの報告をうかがって、ハーザン省を保健省版母子健康手帳の初めての試行利用省にしたいと感じました。なぜなら少数民族の多い山岳地帯のハーザン省で行う際に、この2つの村の先行経験が、保健省やハーザン省の幹部の人々の不安感を払しょくし、そしてハーザン省全体が母子健康手帳を有効利用されたら、その経験は必ず他の省に母子健康手帳を導入するときに役に立つ情報を提供すると考えたからです。もしハノイ近郊のような条件の整ったやりやすい省でいくらか試行事業をしても、「条件の良い所で使えたって、母子健康手帳は山岳少数民族の多いところで本当に使えるの？」という疑問や不安はいつまでたっても消えないでしょう。

幸運にも2回目の助成をいただくことができたときは本当にうれしかったですよ。これでやっと母子健康手帳の全国展開に一步近づいたと思えました。助成が決まってから、共同研究者である保健省の人たちをハーザン省へ、ハーザン省の人たちをベンチエ省へお連れしました。「百聞は一見にしかず！ 研修」

ものを数種類使っていて、保護者がなくしやすくて困っていること、またベンチエ省の母子健康手帳への高い関心をもっていることが明らかになりました。

ベトナム保健省に変化が出てきたところで、2007年に助成金を使って、今まで15村で母子健康手帳を使っていた2省で調査をしました。これによるとお母さんたちも集落のヘルスワーカーさんたちも診療所職員の人たちも大多数が高い評価をしていましたが、やはり保健省からの指導も系統的な研修もないので、その点の要望が出ていました。この結果は、ベトナムで母子健康手帳の導入には、保健省から系統的に研修を伴う指導をするべきであるという課題を明確に示しました。

その課題を実行するべく2008年の3月には同じく助成金を使って、今度は保健省と大阪大学の共催で第1回の母子健康手帳国家会議をハノイで開催しました。保健省代表とすでに省内の全村あるいは一部の村で母子健康手帳を使っている経験のある5省の保健局、国際機関やマスメディアなど約80人が参加しました。この国家会議で保健省副大臣は、母子健康手帳の全国普及への期待を表明されました。また政府の主導性が重要であること、研修が重要であることなどが確認されました。でもやはり現実はそのなりに甘くなかったのですね（笑）。

資金がないからと言って手帳の開発がなかなか進まなかったのです。多分まだ母子健康手帳が役に立つかどうか本当の確信がない段階では政府の予算もつかないからでしょう。

です。やはり現場を見ていただくのがいちばんなんです。

そして、2009年4月からいよいよ初めて保健省版の母子健康手帳の作成が始まりました。母子保健局は今までのベンチエ省での母子健康手帳の内容を参考に、ベトナムの政策で行っている事業の内容をきちんと書き込めるようにし、また色々な専門家の意見も聞きながら作成されました。加えて特にこの事業のカギを握るボランティアの各集落のヘルスワーカーさんたちや、診療所の医療職員の皆さんに母子健康手帳のことをきちんと理解していただくためのガイドラインも作られました。

印刷されてきた母子健康手帳を見た時には、やっとここまで来た！と感無量で思わず保健省で泣いてしまいました。そしていよいよ2009年6月1日に使用開始の記念式典を行い、ハーザン省での母子健康手帳を使った事業が始まったのです。

ハーザン省での母子健康手帳の使用状況はいかがですか？

2009年10月に行った1回目のフィールド調査では、ハーザン省内11郡全195村のなかからそれぞれ地理的条件の異なる3郡内の12村に加えて、省や郡の病院の産科・小児科、各村にある村診療所の医療職員、各集落に配置されている医療ボランティアワーカー、母子健康手帳を使用している妊婦さんや1歳以下の赤ちゃんを育てているお母さんたちを対象に網羅的なアンケート、ヒアリン

2008年に2度目の助成を受けた研究はどのような特徴がありますか？

2001年から日本外務省の草の根資金協力を受けた母子保健改善事業で、5省計10村（各省2村）の村診療所の備品が改善され、母子健康手帳を使っておられました。私はこの事業をコーディネートしていた関係で、全10村を訪問していました。その中で熱心に使っておられた北部のハーザン省の2村で、2003年に修士論文を書くための調査をさせていただいたのです。

そのうちの1つの村を2007年の11月に再訪問した際に、村の副村長さんが「母子健康手帳が私たちの村に来てから大きく変わることが2つあります。1つは村民の知識が改善されたことです。そしてもう1つは村民の村民ネットワークが強化されたことです」と報告してくださいました。これはまさに私の予想通りで、「これや！」と思いました。私

グを行い、母子健康手帳導入直後の実態を把握し課題を抽出しました。また2001年から母子健康手帳を使い続けている村の皆さんにもフォーカスグループでご意見をいただきました。合計666人の皆様のご意見をうかがうことができました。2010年4月には2回目の調査を同じところでさせていただき予定です。

調査結果で特に興味深いのは、字の読めない妊婦さんたちやお母さんたちからも手帳を手元に置いておきたい、という意見が多かったことですね。また手帳をもらってから診療所や集落のヘルスワーカーさんと前より親しくなれた、という言う妊婦さんやお母さんが大多数でした。実際にお母さんたちが手帳を大事そうに使っておられるのを見ると、教育レベルが低いだけで母子健康手帳をうまく使えないと決めつけてはいけなくと強く感じました。

しかし、その一方でいくつかの問題点も明らかになりました。昼間公立病院で母子健康手帳にデータを書いている医師たちが、夜診療している自分の私立クリニックで母子健康手帳に書いていなかったり、手帳を渡す前の健診や分娩のデータなどが書かれていなかったり、当初配布していたのが省立病院と診療所だったので忘れたときに二重受領をしていたりということでした。それで調査後に保健局から招集していただいてすべての郡の代表者の方や省立病院の方と対策会議をしました。そこでは私立クリニックにも書いてもらう、渡す前の情報も新しい母子健康手帳に書

き写す、手帳を渡す場所は村や町の公立の診療所に限ることなどを決定しました。この内容はその後省の保健局から文書で降ろされました。

ただ、このような課題は今後他の省に展開していく際に、保健省から指導していただくことが重要だと思います。こうしたハーザン省での調査結果は、ハーザン省だけでなく他の省での母子健康手帳の普及事業のためにとっても役に立っていると思います。

2009年10月には、ベトナム保健省が策定した「子どもの生存に関する国家計画」の中に、2015年までに母子健康手帳を全省に導入する旨が正式に明記されました。長らくベトナムに携わってきた者からするとこれは省の活動が政府を動かしたポトムアップの画期的な事例だと思います。ベトナムは社会主義国家なので、一度国が決定したことは比較的スムーズに地方に伝播し、実行されやすいという側面をもっています。ベトナムのこの地域でも日本のように妊娠したら母子健康手帳を使えるようになってほしいというのは、今や多くの日本やベトナムの人たちの夢になり、その実現へ一歩一歩近づいています。

プロジェクトに懸ける想いと、国際協力に携わる若い人たちへのメッセージをお願いします

国際協力に関わる方法として大きく3つに分かれると思います。いわゆる国連や国が行う事業での関わり、NGO/NPOが行う事業での関わり、そして研究者としての関わりです。私はこの3つの分野全部で国際協力を

した経験がありますが、いかなる組織の国際協力であっても資金には限界があります。ですからいかに少ない資金で大きな効率を上げるかということは、非常に重要な視点です。そのためには自分の専門分野だけではなく、その関連領域や周辺領域の研鑽を積んで視野を広げることが、非常に重要だと思います。

まためまると、これから国際協力をめざす人々には、広い視野や見識、国際協力を受ける人たちの立場に立って真摯に考え共感できる人間性、そして多様な分野の専門家との協調性が必要だと思います。私は、あと1年余りで還暦を迎えますが、自分の好奇心を大事にしてたくさんの人たちと心を通わせながら人生を生きていきたいと思っています。

ずっと先に、ベトナムに行つて色々な省で妊婦さんや赤ちゃん連れのお母さんたちにアポなし路上インタビューをするのが夢です。彼女たちはどのようにして母子健康手帳がベトナムに来たかなど



まったく知らないと思いますよ、「母子健康手帳が役に立っていますよ」といわれる声を聞いてみたいのです。これぞ「自己満足」の極みですね(笑)。

THE TOYOTA FOUNDATION トヨタ財団ジャーナル March 2010

INFORMATION

- 地域社会プログラムシンポジウムについて
- 2009年度地域社会プログラム公募状況
- 2010年度アジア隣人プログラム、研究助成プログラムの公募を開始

地域社会プログラム シンポジウムについて

トヨタ財団地域社会プログラムでは、地域社会の多様な人々の意識共有の場の創出と、財団のネットワークづくりを目的に、2008年度より新しい試みとして、日本各地でシンポジウムを開催しています。

これまでに福岡、岩手、広島、長野の4県で開催してきましたが、地域づくりに取り組む活動家や、地元企業家、行政担当者などの話を共有し合うことで、参加者にとってシンポジウムは、互いに刺激しあえる「仲間」との交流を深めるまたとない機会となり、財団にとっても地域社会の再生・振興に向けた仕組みづくりのアイデアが得られる貴重な場となっております。

また、シンポジウムは地域の間支援組織などの協力を得て企画・運営され、それぞれの地域の人々にとって身近な、幅広く人々が

興味関心を持つことのできるテーマを設定して開催されてきました。

- 第1回 福岡(福岡市)・・・2008年12月6日(土)開催 「民が主役となった地域社会の実現へ——地域に根ざした『仕組み』づくりを考える」
- 第2回 岩手(盛岡市)・・・2009年3月27日(金)開催 「先進事例から学ぶ！地域社会が抱える課題に対して私たちができること」
- 第3回 広島(広島市)・・・2009年6月27日(土)開催 「地域における新たな『つながりづくり』を考える——豊かな地域社会の実現に向けて」
- 第4回 長野(長野市)・・・2009年8月8日(土)開催 「中山間地域から考える『くらしの豊かさ』——新しい『長野モデル』の構築と発信に向けて」

各シンポジウムでは、「地域の外からの気づきから、地域の人々の主体的な参加を引き出すこと」、「小さな成功体験の積み重ねを経つつ、社会を変えうる大きなうねりへと繋げること」、「人材の育成・活用と連携・協働の『仕組み』をつくること」、「モノを作る前に人を作ること」、「自分の夢を持ち続け、また人の夢を受け入れること」、「活動の担い手の間で、地域の中長期的なビジョンが共有されること」、「活動を行う前に、まずは地域資源の

調査や把握を行うこと」など、地域を元気にするには何が重要であり、大切なかが議論の的となりました。

また、地域社会プログラムでは、めざすべき地域社会像を模索すべく、2009年度より、各地で助成対象者のためのワークショップも開催しています。ワークショップには、毎回、参加者による活動紹介などを踏まえ、財団や地域社会プログラムへの率直なコメントや提言が寄せられています。

トヨタ財団では、こうした場が、地域社会の多様な人々にとって、より良い地域づくりに向けた関係を築ききっかけとなることを願っています。

2009年度 地域社会プログラム公募状況

地域社会プログラムでは、2008年度にプログラムの大幅改訂を行いました。今年度は、引き続き「地域に根ざした仕組みづくり——自立と共生の新たな地域社会をめざして」を基本テーマとし、これまで特定課題としていたユース助成(高校生対象)および、助成重点課題としていた「離島助成」を本体の中に組み込み、公募を行いました(2009年10月1日～11月9日)。

メールマガジンや、さまざまな情報媒体を用いての広報活動、そして全国9カ所での公募説明会および個別相談を実施した結果、応募件数は619件となりました(昨年度578件)。

今後、選考委員会による審査を経て、3月開催の理事会にて正式に助成プロジェクトが決定されます。たくさんのご応募ありがとうございます。

2010年度アジア隣人プログラム 研究助成プログラムの公募を開始

2010年度のアジア隣人プログラム(含む特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」)および研究助成プログラムの助成プロジェクトの公募を3月中旬から開始します(締め切りは5月中旬予定)。詳細については、3月16日以降に財団ウェブサイトをご覧ください。みなさまのご応募をお待ちしております。

訃報 石井米雄先生

京都大学名誉教授で東南アジア地域研究者の石井米雄氏が2月12日に80歳でご逝去されました。石井先生には当財団の国際部門を立ち上げて間もない時期から多くの助言をいただき、1982年から国際助成、「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムや東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)などの選考委員長やアドバイザーを歴任され、助成プログラムの発展にご尽力いただきました。また、1990年から2006年まで評議員、理事も歴任されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

OPINION

「顔の見える」信頼関係を育むために



● 姫本由美子
(トヨタ財団チーフ
プログラムオフィサー)

最 近「東アジア共同体」構想が喧しく提唱されている。東アジアの範囲をどこまでとするかについては人によって考えが異なるが、一般的には東南アジアに日本、中国および韓国を加えた地域と捉えられているようだ。そして、日本の安全保障についてはアメリカとの同盟関係が基軸と考えられているのに対し、「東アジア共同体」構想では経済、文化の分野に重点を置いて、同地域内の関係を密接に築いていくことを主張する論調が目立つように思われる。こうした地域共同体の議論では、どうしても経済分野に関心が向けられがちであるが、一つの地域共同体を形成するために、文化を根底に据えた人と人との絆を結んでいくことが重要なのではないかと考える。

当 財団ではこの文化に重点を置いた交流や支援を30年以上前から東南アジアにおいて行ってきた経験がある。東南アジアの

固有文化の保存と振興をめざした「東南アジア国別助成」、日本と東南アジアの文学作品を相互に翻訳して出版し合う「隣人をよく知ろうプログラム」、そして後に東南アジア域内の学術交流を支援するために東南アジアの人々と立ち上げた「東南アジア研究地域交流プログラム」(SEASREP)などである。

しかしこれらの活動が何の障害もなくスムーズに開始されたわけではなかった。東南アジアで活動を行うにあたり2回にわたって集中的に現地を訪問したのだが、日本企業の進出と、日本の経済的優位および日本人の素行などを非難する厳しい日本批判に直面した。そこで行ったことは、できるだけ多くの東南アジアの人々の意見に真摯に耳を傾けることであった。東南アジアの人々と率直に意見交換を行うなかで、お互いの顔が見える信頼関係を彼らとの間で築いていった。東南アジアの人々と強い絆を育み、お互いの思いを共有することができたからこそ前述したプログラムを生み出すことができ、それが双方に受け入れられていったといえよう。

こ れに似た状況——といってもそれは戦争という比較にならないほどの強制力を伴った状況であったが——の大きな国際関係のうねりのなかで、個人の絆を大切にしたい歴史上の人物が思い浮かぶ。アジア太平洋戦争期において、陸軍の宣伝部に徴用されジャワに派遣された文化人の一人であった作家、武田麟太郎である。インドネシアを占領し続けた日本軍の立場であることにやりきれなさを感じながらも、インドネシアの作家たちと

BOOK REVIEW

出版物のご案内

助成プロジェクトに関連した書籍を紹介いたします



閉ざされた国ビルマ

カレン民族闘争と民主化闘争の現場をあるく

宇田有三 著

- 発行：高文研
- 発行日：2010年1月31日
- 価格：1,700円+消費税

著

者の宇田有三さんは、2006年度の研究助成プログラムにおいて「命」の尊厳を求めて——写真撮影を通して現代ビルマの実態と今後を追う」プロジェクトで助成を受けたフォト・ジャーナリスト。1993年以来、計30回、延べ4年間にわたって現地に滞在しながら、ビルマの普通の人たちの暮らしをファイナダーに収めてきました。

助成の成果である本書は、「一国内における世界最長の内戦」であるビルマ軍事政権とカレン人勢力の紛争の壮絶な取材記から、ビルマ人の日常的な生活模様や恋愛事情に至るまで、写真を交えた読みやすい筆致で描かれています。

真摯に交わり、インドネシアの独立を願う彼らに共感して、危険を顧みず独立に向けて尽力した武田麟太郎は、インドネシア語を独学し、インドネシアの文学を熱心に読んでそれを日本語に翻訳して日本に紹介しようとしていた。彼は日本の敗戦後の混乱期に急逝してしまつたため、それは実現できなかったが、時流に飲み込まれずに、人と人との絆を大切にして日本とインドネシアの関係を築こうとした。

で

は、現在の日本の立場はどうであろうか。冒頭で記したような「東アジア共同体」構想がある一方で、国内では、右肩上がりの経済成長の神話が崩れ、少子高齢化や経済格差の問題などが山積しており、将来への展望が見えない不安が渦巻くなかで、海外にはあまり関心を向けない内向き志向が日本全体を覆っているように思える。

そうした状況だからこそ一層、日本が世界の一員であることを自覚し、積極的に海外の人たちと交流することが求められているといえるのではないだろうか。そのなかにおいて当財団は、その設立趣意書に記された「世界的視野に立つて……社会活動に寄与する」ことの意味を噛みしめ、海外の人々との対話を大切にし、より多くの人たちとお互いに顔の見える信頼関係を育んでいくように努力することが重要であろう。そうした行動をとることは、現在アジアで展開している「アジア隣人プログラム」に良い作用を及ぼすだけでなく、世界の時流に先んじた新たな国際プログラムを生み出す原動力ともなるだろう。



ケニアにて Photo by Yuki Honjo

写真：本庄由紀(2009年度研究助成プログラム助成対象プロジェクト共同研究者)

Rizili ni popote
usichoke kutafuta

恵みはどんなところにもある。
探すことに飽きてはいけない。

本誌「愛と恵みのケニア紀行」P.33より



● 広報誌として装いを新たにしたこの『JOINT』も3号目を発刊することができ、ご執筆をいただいた方々や編集に携わる皆様のご協力に心より感謝いたしております。
今号は、母と子の絆を軸に、人と人が豊かな気持ちでかわり合っていくためには、今、何をすべきかについて考えてみたつもりです。特集企画を通じ、かつての日本人は、相手のことを慮り、おゆゆかしく誇りとやさしさをもっていらたと思われませんが、特に、昨今は、人としての誇りとやさしさをもって行動のできる大人が少なくなつた感も残念ながらいはします。
このことは、幼少のころ、最初に接する親から数え切れないほどの無償の愛を授かった子どもが少なくなり、愛された経験を持たぬままに大人になつたせいで、人に愛を授けることができなくなつてしまつたためではないかと感じる次第であります。
とかく、殺伐とした世相ですが、母と子の絆が強くなることによつて、やさしさ・微笑み・思いやり……、そんな言葉に包まれた明日が必ずやってくると思ひます。[A.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォーム、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.3

発行日 2010年3月15日
発行人 加藤広樹
編集人 野々宮彰彦
発行所 財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] http://www.toyotafound.or.jp/

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

● 現在、5歳になる長男が6カ月のとき、三砂先生の著書『オニババ化する女たち』と運命的な(?)出会いをしてしまいました。その後、三砂先生が財団の助成対象者となり、「赤ちゃんにおむつはいらぬ」プロジェクトを開始した時から、二人目ができたらぜひ実践したい、と思つていたところ、次男を授かり、ときどき悲鳴(?)をあげながら、現在1歳の次男におむつなし育児を楽しく実践中です。
そんななか、私にとっては今回の対談はとて深く、心に染み入るような企画でした。読者のみなさんほどのように感じられたでしょうか。
あるときふと、「そういえばトヨタ財団の広報誌でこんなことも言っていたなあ」と思い出していただけのものであつてほしいと思つています。このよつな経験をさせてくれた子どもたちに感謝しています。[K.]

さまざまな形で、私たちの生活を支える大切な役割を担っています。しかし、その大切さに気づく機会をもてる人は、そんなに多くはないかもしれません。
今号は、そうした儂くも社会から消えてしまふような「いのちの恵み」の素晴らしさがたくさん詰まつた一冊となっております。学ぼうとして学ぶものではなく、日々のくらしの中で自然に身につけることができる恵み。そんな素敵な恵みの存在にみなさんも本誌を通して気づき、知つていただけたら嬉しいですね。[N.W.]
● いろいろな意味で、楽しく刺激的な3号となりました。誌面の都合で省かざるを得ませんでした。巻頭の「対談」のさいに語られた、「男はもつとエンタテイナーたれ」という一言は、けつこう効きました。それは、本号の企画が進行中に亡くなつたマイケル・ジャクソンを偲んでのメッセージでした。まずは私たち大人の強張つた「おつむ」から「おむつ」をはずさない！と叱咤激励されているよう……。[笑]。[I.]



THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.3